

第49号

学体連会報

平成 24 年度

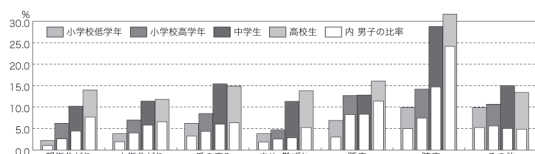


財団法人 日本学校体育研究連合会
(<http://www.gakutairen.jp>)

生きる力の育成は“足育”から

児童生徒、足トラブルの実態

小学生 36%・中学生 57%・高校生 74% は
足トラブルの経験がある。



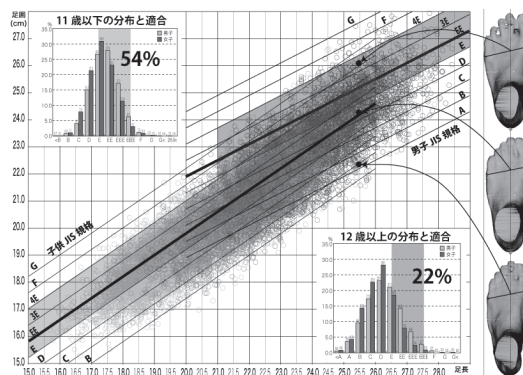
児童生徒 10,000 人の足計測の結果、子どもの足トラブルが、
足専門医の予想より、**10 倍も多い**ことがわかりました。
また、親世代に比べ、足は長細くなっており、
子ども達の足アーチが低下していると考えられます。



シューズが足に合っていない

小学生 46%・中学生 81%・高校生 73% は
足に合う学校シューズを選べなかった。

足に合わないシューズは、足トラブルの原因になりますが、
学校シューズは、児童生徒の 60% に適合していません。
さらに、70% が大きいサイズを履いているので、
足に合ったシューズを履いているのは 10% 程なのです。
これは、**体力・運動能力低下の一因**であると思われます。

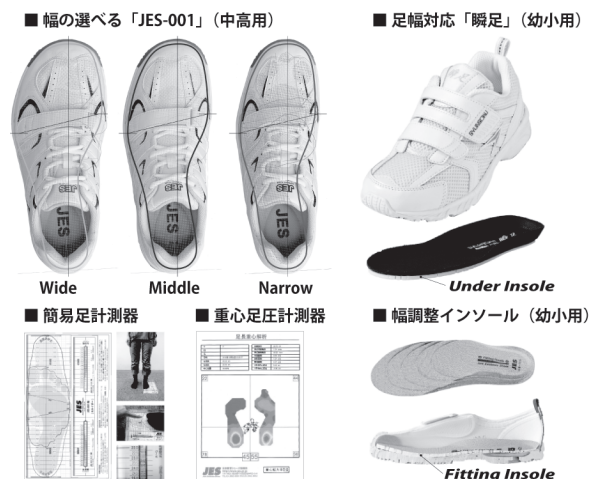


足元からの健康教育“足育”を

“足育”は、足を知り、足に合った靴を選び、
正しく履いて十分な運動をすることから。



足計測データに基づいた、学校シューズの研究開発をはじめ
足育研修会や、足計測の普及など“足育”を進めています。



スポーツ基本法の成立と学校体育



昭和六十一年の「スポーツ振興法」の制定から五十年たった。平成二十三年六月にそれに代わる「スポーツ基本法」が成立し、基本法の時代に入った。これは日本のスポーツ政策の方向を変えるものである。子どもたちのスポーツ環境が変化し、学校の体育授業にもさまざまな影響を及ぼし始めている。

企業スポーツ時代から地域スポーツ時代への転換である。地域の娯楽や楽しみ活動としてのスポーツにしようというのである。子ども

もたちは地域に密着し、身体的な活動の楽しさを学んでいく。ダンスもよいのである。ゲームを楽しみトレーニングを楽しみ、仲間との交流を楽しむのである。年齢の様々な地域集団の中で、さまざまな楽しみを知り、自分たちの楽しみ方を学ぶ。生涯にわたり、いろいろな楽しみ方を積み重ねていくことができることを学ぶのが望ましい。生涯学習社会の実現である。地域はその場である。総合型スポーツクラブの普及が進んでいるが、楽しい地域社会生活を実現する核となると期待されている。

員が学ぶ。身体的な練習の法則や原則、仲間との好ましい関わり、ルールの遵守、フェアプレイの精神、進取の気性、友愛、生命の尊重など、教えておかなければならない。

学校で体育を教育する重要性がますます高まる。この教育が地域の生涯スポーツの質を決めるであろう。地域スポーツに参加する小中学生はまだ少ない。義務教育段階で、正課の授業は全

contents

- ・会長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
- ・座談会、全国学校体育研究大会近年度開催地・・・・2
- ・第50回全国学校体育研究大会長野大会を終えて・・・・23
- ・第51回全国学校体育研究大会北海道大会を迎えるにあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
- ・北海道大会の見どころ・・・・・・・・・・25
- ・今年度全国学校体育実技指導者講習会について・・27
- ・足元からの健康づくりについて等・・・・・・30
- ・^{あしよく}足育全体計画・・・・・・・・・・・・・・・・31
- ・^{あしよく}足育低学年特別活動授業計画・・・・・・・・・・32
- ・^{あしよく}足育中学年特別活動授業計画・・・・・・・・・・33
- ・^{あしよく}足育高学年特別活動授業計画・・・・・・・・・・34
- ・平成23年度個人賛助会員一覧・・・・・・・・・・35
- ・特別賛助会員等一覧・・・・・・・・・・36

表紙にある学校体育連合会ロゴマークについて

上部の円は幼児を、それを受ける形で3つの羽が描かれている。小さな羽から順次、小学生、中学生、高校生を表示している。幼児・児童・青年がしっかりと大地に足を踏み張り、両腕を高くかかげて、生き生きと運動している姿をイメージすることができる。子どものあり得べきシエマを発展的に象徴している『学校教育のシンボリズム』ないしシンボシエマ。図柄は細い地に白抜きである。（会報第28号浅田隆夫理事長（当時の役職））

〒151-0052 東京都渋谷区神園町3番1号 国立
オリンピック記念青少年総合センター内財団法人
日本学校体育研究連合会
電話 03-3465-3954 F A X 03-3465-7464
発行者：片岡 暁夫
発行日：平成24年10月24日
male: gakutairen@msb.biglobe.ne.jp

座談会

日時…平成二十四年七月七日（土）

場所…国立オリンピック記念青少年総合センター内 学体連事務局

昨年十月に文部科学省から『言語活動の充実に関する指導事例集』が出版された。そこで、教科調査官から言語活動充実の背景とその理念をお話しいただくとともに、学校の具体的な実践報告と、その内容の価値付け等を大学の研究者からいただいた。学校体育のさらなる充実の参考にしていただければ幸いである。

『座談会の趣旨説明』 司会

お忙しい中お越しくださ
いましてありがとうございます
ました。文部科学省から『言
語活動の充実に関する指導
事例集』ができました。子
供たちの日常生活の中での
関わりをつなぐものは、
言語活動です。また、今の
子どもたちを見ておしまし
て、大きな課題というのは、
自己肯定感が少ない子ども
がとて増えているような
気がします。そういったこ
どもたちを支え合うのも言
語活動だと思います。本日
は文科省の指導を得ながら
各地で具体的な実践をされ

た先生方が三人お集まりで
す。そういった先生方のお
話の中の事例を全国に広め、
言語活動を充実させていく
という意味でも、この座談
会がお役に立てばと思っ
ています。はじめに岡出理事
から学体連のご挨拶を頂き
たいと思います。

『座談会への期待』 （岡出美則先生）

宜しく願います。今
日はご多忙の中お集まり頂
いてありがとうございます。
学体連としましては、
出来るだけ質が上がるだけ
ではなく、良質のものが横
にも広がっていくというこ
とについて、いろんなサポ
ートが出来ればというこ

とで、いろんな取り組み方
をさせていただいています。
その事業の一つとして会報
の発行というものがござい
ます。今回お集まり頂いた
のは、この会報で出来るだ
けホットなトピックスに関
して、会員の方たちにいい
情報を提供するためにみな
さまにお集まり頂いたとい
うことになります。実際に
読まれる方のことを考えま
すと、こういうところは困
りますとか、どういうふう
に考えていったりすると
そういう事態を解決してい
くことが出来るのか。そう
いうアイデアもご紹介いた
できれば読まれた方にとつ
ても励みになるのかなとい
うふうに思います。そうい

う意味でいい情報をここで
交流できたらというふう
に思いますのでよろしく願
いいたします

司会

なお、今年からは電子デ
ータの形でメールマガジ
ンに載せて、全国津々浦々
で配信したいと思ってお
ります。それでははじめに
白旗先生の方から言語活動
の充実についての基本的な
考えを述べていただければ
ありがたいと思います。

（白旗和也先生）

『言語活動に関する基本的
な考え方』
言語活動に限りませんが、
教育についてキーワードが

出されるとそれだけに捉わ
れてしまい、例えば教育活
動の中に話し合いを入れら
れればよいといった教育の本質か
ら浮き出たような形で捉え
られてしまうことが課題だ
と思っております。言語活動
の充実がうたわれた背景に
ついて、少し話をさせてい
ただきたいと思えます。
学力の重要な要素が、学校
教育法の第30条に3点明
記されました。一つは簡単
にいうと基礎的、基本的な
知識や技能です。二つ目が
知識、技能を活用して、課
題を解決するために必要な
思考力、判断力、表現力等
の育成。三つ目が主体的
に学習に学ぶ態度です。で
すから、どの教科であって



国士舘大学文学部教育学
科准教授 細越淳二先生



(財)日本学校体育研究連合会
理事 筑波大学人間総合科
学研究科教授 岡出美則
先生



文部科学省スポーツ青少年
局体育参事官付教科調査官
石川泰成先生



文部科学省スポーツ青少年
局体育参事官付教科調査官
白旗和也先生



(財)日本学校体育研究連合会
理事 (東京福祉大学教育学部
教授) 菅原健次『司会』



埼玉大学附属中学校
八坂和典先生



八王子市立大和田小学校
井口幸恵先生



滋賀県甲賀市立甲南中
部小学校 東文三先生

も、教科の充実のためには、この3点をしっかりとっておさねなければならぬということ。さらに、総則では、各教科において思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、基礎的、基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに言語環境を整え、言語活動の充実を図ることに配慮することが求められていると書かれています。このことは、知識、技能を活用して課題を解決する、いわゆる課題解決能力を身につけていくという事は、日本の教育において非常に重要なことで、すべての教科を通して育成しなければならぬものであり、そのためには思考力、判断力、表現力等の育成が必要になってくる。そして、その充実のために、言語に関する能力の育成が不可欠である。それを育成する具体的な場面が言語活動であるということですから、ただ単に言葉と交わせばいい、書けばいいということではないという事です。意味のある話合いの場面が設定されな

ければ、求めている言語活動とは言えないのではないかと思います。また、平成20年の学習指導要領等について示された中央教育審議会答申では、言語については知的活動の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性、情緒の基盤でもあると示されています。言語活動については国語中心と言われつつも、国語だけで出来ることではないのですべての教科を通して、言語活動の充実を図る必要があります。体育は、知的活動というか論理的思考、つまり思考判断が指導内容として位置付けられており、また、コミュニケーションを含めた態度も位置付けています。コミュニケーションのない体育なんて考えられませんし、それから感性、情緒といういわゆる楽しさは、体育のベースとして押さえておかなければいけない教科でもあると思います。言語活動と非常に深い関係であるといえます。体育の授業の充実を目指せば必然的に言語活動の充実も付随してく

るといえるでしょう。ただし、課題として、話し合う必然性やねらいが不明確なまま、単に言語活動が必要だからという理由で話し合いの時間を設定している授業がかつてよく見られました。これによって運動量が減ってしまうと、それは決して体育が目指している言語活動ではない、むしろ本末転倒です。文部科学省で平成22年12月に作成した「言語活動の充実に関する指導事例集」にも、言語活動が単に活動することに終始することのないよう各教科等のねらいを言語活動を通じて実現するために意図的・計画的に指導することが重要である。と書かれています。と書かれています。充実によって体育そのものの充実を図らなければならぬということが大変重要な押さえるべき点です。



司会
基本的なところを押えて
いただきました。それでは、
石川先生お願いします。

『言語活動の充実の意義』
(石川泰成先生)

はい。白旗調査官からも
ありました。各教科等の
言語活動の充実の意義とい
うようなことも言語活動の
充実の事例には示していま
す。国語科で培った能力を
基本に、それぞれの教科等
の目標を実現する手立てと
して、と、はっきり示され
ています。よく、先生方か
ら言語活動の充実が大事だ
ということが、そのことだ
けでぽつと出てくるような
発言がありますが、それぞ
れの教科等の目標を実現し
たり、指導内容を身に付け

るたりするための手立てと
して言語活動の充実がある
という整理をしていただき
授業の充実をお考えいた
きたいのです。

各教科等の目標や指導内
容との関連、児童生徒の発
達の段階や言語能力を踏ま
えて、言語活動を適切に位
置付けるということです。
誤解を恐れずに言えば、体
育科・保健体育科のねらい
に基づいてその授業を充実
させていったときに、言語
活動も充実していました、
という関係性を持っており
ます。



司会

よい授業をすることがい
い言語活動にもつながって
いるのではないのかなとい
う視点を有り難うございま
す。

(石川泰成先生)

よい授業の多くは、言語
活動が充実しているといえ
ますね。まず、先生の話も
分りやすく、まとまりがあ
ってすっきりしています。必
要な掲示物の説明等も子ど
もたちに分りやすい表現等
が工夫されています。子ど
もたちの教え合いが活発に
なされたり、賞賛や励まし
の声があふれていますね。
挑戦意欲をかき立てたり、
考えをまとめたり、意見交
換をしたり、先生が学習活
動として仕組んでいること
です。例えば、教え合いな
さいといわれても何を教え
合えばよいのか、はっきり
分からなければ教え合うこ
とに消極的になる子もいる
でしょう。教え合える場を
設定し、内容を示したりす
ること、生徒の活動が活
発になっていくのだと思い
ます。つまり、指導内容と
の関連から、教師の授業づ
くりが重要で、そのことが
言語活動の充実につながっ
ているものと考えます。

『学校の指導について』

司会

はじめに東先生から実際
の取り組みというなどとこ
ろで先生がやってこられた
ことをお話してください。

『小学校体育の言語活動』

(東文三先生)

前任校の滋賀県甲賀市立
貴生川小学校で研究主任と
して、平成21・22年度国
立教育政策研究所の指定で
新学習指導要領の趣旨を具
体化するための指導方法の
工夫改善に関する研究を
2年間させていただきま
した。現在、甲南中部小学
校に勤務しています。東とい
います。よろしくお願いい
たします。

この研究では、新学習指
導要領の中で、体育科にお
ける言語活動の充実という
ことをテーマにして研究を
進めました。「仲間とともに
健康で安全な生活を目指し、
運動の楽しさに触れる授業
づくり」ということを研究
主題として取り組ませてい
ただきました。先程白旗先
生もおっしゃったのですが、
言語活動という言葉からイ
メージすると、話し合い、

考える、書く、読むなどの
時間を十分にとるというイ
メージがありますが、運動
することが主活動である体
育では違和感があつて、そ
をどう捉えていくのかと
いうことが研究のスタート
になりました。その時、白
旗先生からご指導いただい
たことは、そのような時間
をたくさん取るのではない
活動を充実させる体育学習
ではなく、体育の目標を達
成するために言語活動を充
実させていくというスタン
スで捉えることが大切であ
るということでした。特に
運動領域では、活動中の気
づきや動きのポイントをタ
イミングよく言語化すると
いうこと、活動の方法を工
夫したり選んだりすること
で思考する場面を設定する
ということ、コミュニケーション
の部分では教えあつ
たり、励ましあつたり、教
師と児童・児童同士がかか
わりを持ちながら授業をつ
くるということ、主にこれ
らの三つのことが体育にお
ける言語活動の充実ではな
いのかと考えて取り組みま

した。

次に大事にしたいこととして、学習内容、指導内容の明確化というところも大きなポイントになっていた。というの、言語活動といっても体のどの動きに気付くのか、何をアドバイスするのか、ただ単に「がんばれ。」と励ませばよいのか、という疑問が起こってきます。指導者が学習する内容、指導する内容を明確にしておかないと、なんでもありの言語活動になってしまう、その中でねらいに沿った言語活動が出てきても、取り上げられない場合もある、そこを焦点化する何らかの工夫が必要ではないかということで研究をすすめてきました。

具体的な例として高学年のハードル走の学習についてお話しします。ハードル走というタイムを縮めることに着目してしまいがちですが、小学校の体育の学習では、そのことが一番の目標ではなく、リズムカルに走り越えることを追求していくことを指導内容として実践しました。リズムカル

というのは、抽象的でわかりにくいところがあります。それをより具体的にすると、三歩のリズムをイメージして、ト・トン・トンのようなように言語化して提示し、子どもたちに意識させました。子どもたちは、このリズムをもとに動きに気付いたり、励まし合ったり教え合ったりしました。「トトトトトのようなリズムになっているよ。」などと教えてあげたり、並走して同調させて走ったりしてリズムカルな走り越しを目標にして課題解決に向かいました。

また、教材・教具の工夫も、言語活動の充実には欠かせないものでした。子どもたちが、ハードルをリズムカルに走り越すため、壁にあたるのが、「ハードルのバーにあたったら痛い。」、「引っかかったらこけるので怖い。」ということでした。アンケートの結果でも、「私は怖い。ハードルをするのがいやです。」という意識を持っている子がいました。そういう児童が壁を克服していく過程でリズムカルな走

り越しに合わせたい、という思いでバーの怖さを取り除こうと考えました。バーの怖さを取り除くには、バーを柔らかくすればいいのではと考え、ホームセーターでバスマットを買ってきて、同僚の先生たちとハードルバーと同じ幅に切っ

て取り替えました。最初は、怖くないスピード感をもってハードルに向かって走り越せる、スピードを保って走り超えるというリズムカルな動きにもなるということで、うまくいきました。しかし、また壁にあたりました。スピードがでけると引っかかることもあります。

引っかかることもありますが、引っかかったときにバーが軽いので転がりやすく、それに体が当たって、やはり怖いというようなことになりました。そこで、今度はバーの真ん中を切って当たってもスツと抜けるようにしました。そうすれば、怖さもないスピード感をもって走り越せるので、リズムカルな走り越しを体験するにはいいのではないかなということになりました。指導内容のリズムカルな走り

越しというものを具体化し、教材、教具の工夫をするこ

とで子どもたちの気付き、教え合いが活発になりました。このような授業をしていくことが言語活動の充実の一つかなと思います。

司会

言語活動を充実していく上で、教具、用具、教材の工夫というののも一つの手立てになるのではないかと思います。ことだったと思うのですが、細越先生、今のお話を受けながらいかがでしょうか。

『内容―教材―教具の一貫性』（細越淳二先生）

よろしくお願いいたします。今の先生のお話をうかがっていて、きつと子どもたちも「もつとこうしたら？」とか「いまのはここがよかったよ」「次はここを見てください」とか、教え合う中身についての言葉がたくさん聞かれたのではないかと聞いていました。そういった授業では、教え合いとともに課題達成を喜ぶ子どもたちの声もたくさん

聞かれたのだと思います。それはつまり、教材づくりの工夫によって学習課題とか共有しやすくしているということですね。意味ある言語活動とは何かを考えた時、この単元この授業ではやっぱりここが動きのポイントになるんじゃないかというところを明確にすることと同時に、それを習得するのに適切な教材を提供する、そのセットが重要なだろうと思っています。今の先生のお話でいえば、ハードルのポイントを明確にして、それに対応する教材教具を検討して授業展開すると、子どもたちも互いの課題や練習の場、その課題解決のためのポイント等を共有できますから、スムーズな見合い、教え合い等の活動を生みだし、豊かな言語活動を促進させることができる。そうやって見てもらって「うまくいった」となれば、「仲間がいてくれたからできた、やった」ということにつながり、人間関係、コミュニケーションスキルにも発展がみられるのだろうと思います。

こういった多くの成果を生み出す意味でも、内容―教材―教具の一貫性が、一つ、ポイントになるのではないのでしょうか。



『言語活動充実のための工夫』（東文三先生）

ハードル走に限らず、めざす動きができたかできなかったかを子どもたちにわかりやすく判断できるようにすることがポイントだと思います。ハードル走では、振り上げ足がまっすぐ振り上げられているか、ということが動きのポイントの1つになると思います。これも子どもたちにとっては、走り越しの動きの流れの中で、判断が難しいと思います。体のどこのどのような動きを見ればよいかわから

ないことがあります。そこで、ポイントをしぼって見えるようにしたのが振り上げ足スコープというものです。厚紙に一辺20cmくらいの四角い穴をあけて、そこから走者の足を覗いて見て、振り上げる足がその枠からはみ出るかはみ出ないかを子ども同士で見合います。このようなことが、振り上げ足をまっすぐあげられているかどうかを教え合いやすくして、目標に向かった言語活動が実践できたと思います。

（細越淳二先生）

学習課題を共有しやすくしているということですね。私も考えたんですけども、やっぱり意味ある言語活動、成果がつながるというんですかね、そういう言語活動をどうやったら生み出せるかと考えた時にさっきも先生おっしゃいましたけれども、指導内容を明確化しようという、これはいまの新指導要領の中にもあると思うんですけども、この単元この授業ではやっぱりこれが動きのポイントになる

んじゃないかということ、それを明確にすることと同時にそれをどうやったら児童生徒の目線で共有共感出来るんだろかという方法論というんですかね、そのセツトなんじゃないかなと思っております。今先生のお話、すごく私も良く分かってハードルのポイントはここだって、それに対応する教材教具を考えてこの内容についてみてごらんよってやるとやっぱり子どもさんたちもスムーズに、評価や見合い、教え合いが出来る、そうやって見てもらうてうまくいったという仲間がいたのでやって良かったなということ、人間関係、コミュニケーションがみられるといいます。言語活動の充実を求めていく上では指導内容とそれに基づいた教材教具あるいは方法論、指導スタイルというところで研究されている先生方もいらっしゃるけれども、そういったところの一貫性みたいなものが一つポイントになるのかなとは思っております。

司会

中学校では、如何でしょう。

『言語活動の充実のポイント』（八坂和典先生）

常々、思っているのですが、「何を身につけさせるのか」とか、「何を学ばせるのか」という視点は、すごく大事ですね。私も言語活動を授業の手だてとして取り入れるとき、うまくいかないときは、求めるものがあっちにいたり、こっちにいたりという事で指導自体がまとまっていないう場面が多かったと思います。やはり授業のねらいをはっきりさせたうえで、子どもたちに学習場面を与えていくことが、すごく重要だと思いました。あと、「できる、できない」という事に関して言うと例えば、ハードルの授業で、振り上げ足がまっすぐ、スレスレのところとべているか確認するために、カードを挟んで、それに触れるように振り上げ足の動作の練習をさせたところ観察者の発言もポイントを絞った発言と

なったり、実施者もカードに触れるという実感からその感覚やコツについて考えるようになるなど、お互いのなかで言語活動が活発に行われたという授業もありました。技能を明確化して、それに対する学習の場面を与えていくことで、言語活動も充実していくのかなと感じました。



司会

技能の明確化が言語活動を活発化させていくひとつのポイントではないかという事です。ここで、指導上のポイントがまたひとつ増えてきました。井口先生はどうですか。

『伝え合う言葉について』（井口幸恵先生）

今話を聞いて、やはり

くと、それはなにを言っているのか分らないっていうそういう現象になるので抽象度の高い言葉を使いはじめていくと、先ほどのリズムカルに走るっていう、そういうことだけを追っていくんだと思うんですよ。そういう意味では、小学校の低学年ぐらいの子どもさんたちに期待するような表現の仕方とか知ってほしい言葉とか、中学生くらいに期待するようなものっていうのは、同じことを表現させているんだけど言葉自体が抽象度が高いものになっていく。そんなことが起こってくるんだろうと思うんですよ。その意味では、言葉をこどもさんたちの実体験とどうにリンクさせてあげるのかということ自体はものすごく大事なことだと思うんですよ。そういうことを考えていくと、ひとつだけ例を出してみなさんで論議していただくと思います。よくお出しするのが、小学校4年生の子どもさんだったと思うのですが、これはたまたま本に載った、跳び箱の授業をず

聞いていました。



司会

子どもたちと向き合っておられるのか今度はその辺を含め八坂先生からお話をしたいだけですか。

『運動の言語と非言語』(八坂和典先生)

そうですね、実際の授業では、言語にできる部分と、非言語的というか言葉より先に感覚を掴んでしまっている生徒もいます。今ちょうど4歳の子供がいて自転車の乗り方を教えていますが、「なんて教えたらいいいのかな」と意外と考えたりするんです。自転車に乗る時に自分がなんで乗れるよ

たということなんです。この手のものっていうのは、ほんとに先ほどのオノマトペとかもそうですけども、ウンとかスンとかそれとか言った方がうまく伝わってしまっているものとかがあるって、逆にそれを言葉で説明せよと言われると言えなくなってしまうっているものが結構あると思うんですよ。こういうものをどういうふうに了解するのかという問題があると思うんですよ。これは、たぶん理科とかも算数とかも一緒だと思うんですよ。これも算数の話とかで良くですんでですけど、算数の授業で分数の割り算ってあるじゃないですか。あれの計算どうすると答えが出てくるのかって、子どもさん、結構つまずきますよね。一時期言われたのは、結果的に答えが出せるだけじゃなくて、何故、分子と分母をひっくり返すといいかを説明出来ないんだめだというふうに言われたと。大学生で数学を専攻している子どもたぶん説明出来ないですよ。でも言葉でそういうことを説明出来ない

続けたけれどその子は跳べなかったっていう結果ですよ。で子どもさんたちもそれまでの間にその子に何も手を打ってなかったのかっていったら、いろんな手を打ってきたよ。しかし、結果的に跳べてなかったと。じゃあ、なんで先生がいな一時間の間にその子は跳べるようになったんだろ。とこういう話になって、先生のほうが子どもさんたちに聞いた。何やったんだと。やったことはものすごく単純で、跳ぶ児童の横に全員横一列に並んで跳び箱に向かってドーっと走って行ったらその児童が跳べてしまった、これは言葉で何かを言ったわけではないんですけど、たぶん走る時のリズムムだとか、そういうものが横にざっと並んでいたとか、みんなが一緒にやってくれるっていう、そういう気持ちを受け取めたとか、そういうレベルではありまですけど、それはどういう走り方をしたらいいという言葉で表現されているわけではないんですけども、感覚としては共有されてしまっ

つとやっているクラスだけ1人だけ跳べない子が授業時間最後のところで残った話です。先生とか他の子どもさんたちもその子を跳ばせたくてたまらなかったんだけど、その時間には跳べなかった。跳べなかったでその子どもさんたちはなんて言い出したかっていうと、こいつを跳べるようにするために1時間欲しいと言いだした。ところが体育の授業時間は終わっている。どうするかっていう話になって体育館使える時間帯をなんとか確保して、それが5時間目に設定できたので、じゃあみんなで次の時間もう一時間だけっていうふうになった。しかし、教師は、出張が入っているのを忘れてた。子どもはおさまらなくて、いやぜひともこの一時間やりたいということになった。そのため、お前たち怪我するなよって言って、先生は不安の中、出張に出て行った。そして、次の日の朝に行ったら子どもさんたちがニコニコしてると。先生は、それまでにいろんな手を尽くし

うになったのかということ
はあまり考えてなかったの
で。だからといって、自分
が乗れないわけでもないし、
あいまいな言葉であつても
子供が乗れないかつていう
と段々と感覚とかコツを自
分の体の中で覚えていつて、
できるようになるんですね。
そこに言葉をどうからめて
いけばいいのかなって考え
させられました。最終的に
授業の中で、使う言葉がわ
かりづらいものであつても、
自分たちの中で、通用する
ものであればそれでいいの
かなという感じはしていま
す。当然こちらが教えるべ
き知識はありますが、子ど
もたちの中で技能を身につ
けるために共有する言葉と
いうのは、こちらが教えた
言葉でないものもあると捉
えています。よく私は、学
習資料に、自分で感じたコ
ツとかできた時の感覚を言
葉で書かせたりするのです
が、私が教えた言葉だけで
はなく、生徒の中で感じた
言葉を記述したりするので、
それがいちがいにダメかと
いわれるとそうではないと
考えています。むしろ、自

分の中から生まれた言語の
方が大切だと思っています。
まとまりのない話ですが、
私はそういう感じで捉えて
いるということです。
司会
共感するところです。そ
れでは東先生はどうでしょ
うか。子供を理解していく
過程を見ながら。

『連続した思考を導く言語
活動』（東文三先生）

またハードルの話ですが、
走り越して素早く振りおろ
す足のことを学習したとき
に、素早くといつてもどの
ような動きが素早いのか
子どもたちにはイメージで
きなかったのです。そうい
う時に着地点に紙コップと
か牛乳パックを置いて踏ん
だ時、大きな音が鳴るよう
に下ろしてみようという工
夫をしました。大きい音が
鳴ったら素早く足を下ろせ
たと判断できるようにしま
した。ただ、これは、大き
な音が鳴れば素早く振り下
ろしてリズムカルなハード
ル走につながるとは一概に
は言えません。そのあと連

続した動作があるので、音
を鳴らすことだけを目的に
してしまつと、リズムカル
な走り越しにはつながりま
せん。そこだけを固執して
いるといけません。一つの
意識の仕方にはなります。
先ほどありました集団のな
かで共通理解を進めていく
学習もその過程で一般的な
言葉や知識としていくよう
に、今後の学習に連続して
考えることが大切です。思
考がストップするのではな
く、次の考えに続いていく
ことで意味のあるものにな
ると思います。だから、野
球の左肩の話も、左肩を落
として打つという事を言っ
て駄目だったから、次はどう
したらいいかという思考に
入ると次のステップに入る
のでそれもまた意味がある
ことなのかと思います。だ
から、次の段階へ進む思考
につながっていればよいと
思います。

司会

音を立てておろすという
ことは、素早さを理解させ
るためのひとつの策と捉え
られます。あと私はローカ

ルなのはいいと思っていま
す。その集団の理解する共
通言語でいいのではないか
と思うのです。

『こんな感じをどうするか』
（井口先生）

私もバレーボールをやっ
ていて、「もつと前で打て」
って言われて、私の中では
ものすごく前で打ってるつ
もりなのですが、それがう
まいかなかつたときに、
先生に怒られて、「空振りす
るぐらいの気持ちで打て」
っていったらジャストミ
ーできました。言葉をちょ
つとひとつ変えるだけで出
来るようになったりとか、
あとスキーも大学のときに
「母指球のここに力を入れ
て前に体重を乗せて」って
いわれたとき、私全くでき
なくて、みんなはそこで「分
かりやすい」って言つて、
出来るようになるんですが、
私は全くできなくて、違う
先生が「立ってる姿勢から、
腰のところに、ちよつと膝
を曲げたようなくところに重
心をおくとうまいくよく」
って言つたら見事出来るよ
うになりました。やはり言

葉は、その人によつて全然
捉え方とか感覚も違うと思
います。小学校の時から自
分の体がどうなつたから出
来るようになったとか、ど
うすると出来るんだつてい
う試行錯誤の時間をたくさ
んとつてあげるといふこと
が大事であることを感じて
います。遊びこむ、のめり
込んでなんとかやりたい、
うまくやりたいと思つて、
偶然出来ることもあると思
うんです、その偶然をまた
何回もそれをやりたいと思
つて何回もやります。そし
て、自分の中で『こんな感
じ』って思うことが大事で
す。それは、感覚だから言
葉にするのは難しいんです
けど、あんまり伝わらない
言葉でも『こんな感じ』つ
ていうのをいつも引き出し
てあげて、先生たちが、そ
れをだんだんだんわかりや
すくしていけるように引き
出していくこと、その思考
を育てることがすごく大事
だと感じます。そうすると
言葉っていうのもどんどん
広がっていくのかなと思ひ
ます。次に、低学年の時に
それが出来る事だけが大事

なんじゃなくて、その動きが他の運動につながった時に、例えば跳び箱の時に、低学年でやったあの動きに似てるからこれをこうやって生かすんだっていうふうに言葉で表せたり、そういうふうによく考えることで、いろんなことに活用していくことが大事だと思います。一緒に走って出来ちゃったっていうのもすごい。リズムを覚えるのはとても大事なことで、低学年では一緒にやったら出来ちゃうこともいっぱいあります。シンクロなども大事にした方法です。跳び箱を指導していて跳べない子には、「先生と一緒に走ってここから踏み切るよ」って言って跳べちゃったりとかっていうことがあるんです。リズムを抽象的な言葉でそうやって、オノマトペみたいにするっていうのはすごく運動では大事なことのかなと思います。

『言語活動の対象と方法を意識する』（岡出美則先生）
なんで体育の授業で言葉を使わなくてはいけないん

ですか。ってこういうのがだいたい技能の話で集約してきましたけど、別に技能を高めるっていうことだけに使ってるわけでは多分ないんです。体ほぐしなんかでも気付きてありますよね、気付いてっていうのも言葉に出してみると、ようやくこんな状態だったかっていうのが分かる。言葉に出さないとあまり自覚がされない。言葉に出すこと自体が、何か自分たちがよく分からなくなっていくというので、言葉にするのは大事なところになるんです。授業のねらいに応じて、どういう場面でこの言葉を使おうとしていくのかと考えていくと、いくつか場面が出てくると思うんですね、さっきも出ていた、子どもさん同士が教え合いをするときでも、表現の仕方がある程度言っておかないと自分たちの日常の生活の中で身につけている表現の仕方をそのまま持ちこんできますよね、失敗するとボロカス言うとか、それは何も悪いことないですよ、みたいな、そういう

ことが起こりますよね。それって例えば、こういうふうに表現してあげると相手の人喜ぶんじゃないとか。あなた、こんなやりかたしたら嫌でしょ、だからこういう表現の仕方しなさいとか。こういうのも、どういう表現をすればいいのかわかってあげること子どもさん同士の関係が築かれていくっていう、そういう問題が出てくると思うんですね。言葉っていうのはある意味、あることを切り取ってくる虫眼鏡とか顕微鏡とかと一緒に道具になすけど、そういう道具になると思うんですよ。高校生とか中学生くらいになつてくるといいプレーってどんなプレーみたいなものって、こういうところがいいんだよね。例えば、球技系等で言うとき空間の使い方がいいの書きますよね。空間の使い方ってどんなことっていうのは、空間の使い方だけではわかんないですけど、スペースが出来るとか、スペースが消えていくとか、そういう言葉を実際学習してきた子供たちって、テレ

ビでゲームを見てたりすると解説の人が言ってる言葉とかもいっぱい出てくると思うんですよ。それによつていいプレーってどんなプレーとか、あいつはこういうところがすごいんだっていうことが見えてきますよね、そういう意味で、運動を観察する能力を高めていってあげるっていう意味でもたぶん言葉の獲得は大事になるんじゃないんですかと。そういう言葉をちゃんと獲得させましょうとか。逆に、先生方が授業で発せられる言葉っていうのは、子どもさんにとってモデルになりますよね。なので先生方がどういう言葉で授業のなかで意識的に使われようとするのか、こどもさんから言葉を引っぱりあげてきてそうだなねそうだよねっていうふうにして使っていくパターンもあれば、こういう言葉を知っておいて欲しいっていうことで提供していった、それをより理解できるようにする授業が展開されるということ等もあると思うんです。それでは、この最初、白旗さん、

石川さんからお話あったように、授業の教科のねらいに応じて言語活動を組み込んでいきましようってなつたときに、言語活動っていうのは、どういう場面でどういうことをターゲットにして私たちは使おうとしているんでしようかって。そういう広げ方もあるのかなって思いながら聞いていますけど、教え合いの時に一番難しいって言うふうに言われるのは、友達に失敗してることを伝える方法は4段階くらいあるんですよ、お前、失敗したということ言う。これは、結果だけを伝えるやり方なので、言われた本人からすると言われなくても失敗してる時は分かるので、わざわざ言ってもらわなくていいよ、ねみたいな、下手すると怒りますよね。何度も何度もいうな。跳び箱跳べない子にまた駄目また駄目っていうふうに言うとか、言われている方は嫌になっちゃう。でも教えてあげましようってすると、そういうふうには教えちゃうケース、あります

よね。二つ目は、君はどういう動きが良かったよっていうふうに、動きの良かったところを伝えてあげる。例えば、先ほど足を振り上げが出来てますよみたいなことっていうのは、結果のいい悪いじゃなくて、出来ていることを伝えるための言葉を言ってるわけですよ、ところがそのケースも失敗してる。どういうふうに変えていいのか分からないので、言われたことを自分のその動きの改善に活かさない。だから、どうすればいいのか教えてほしいと要求するお子さんそれは出てくると思います。それは、動きの変え方を言葉で提供することになります。もつとも、動きの変え方も動作だけを言う人もいれば感覚的にこんな感じでやったらどう。って言う人もいますよね。難しいのはこちらの感覚のほうで、自分がやった時にどんな感覚だったからそれをベースにして語ることが多いんですけど、指導能力の高い人たちは自分の感覚ではなくて、やってる人がこんな感覚でやって

るんじゃないかって照らし合わせるんですよ。あの動きやってるってことは、たぶんこういうところに力が入ってる。こんな感じでやってるんじゃないか。なので先ほどのタブチの話とかも同じようなことなんですけど、こいつはこういうような感覚でやってるからこれが出来てない。じゃあ、その感覚を引き取って修正するときの言葉を出してあげようとする、こんな表現で出来るんじゃないかっていうふうにやられているケースは多いんだろーと思います。この4つ目のレベルは、たぶん、子どもさんたち同士でやれてに言ってもちよつと辛いついていか、よつぽどじゃないとそこにいけないと思うんですよ。でも、そういうのを話してごらんっていうことは言えるわけです。うまくいってる子がどんな感じだったか聞いてごらんっていうと、その子は、おれこんな感じだっていうふうに言ってくれたりする。すると、ああそうか、そんな感じでやってるのか、俺と違っ

たかなってなって。それでまた語彙が増えたりとか、見たこととその人のやってる感覚を合わせるようなきっかけが出来たりしますよね。そうすると教え合いの時にできない人に、俺が言ってるのになんでお前は言った通りにやらないんだよってという話じゃなくって、感覚のずれっていうのが相対露呈しているっていうのが分かってくる。そうすれば、それをもうちよつと引き取って、どういうふうに表現しようかっていう、また次のステップがでてくる。中学生とか高校生くらいになつてくるとかなり要求しても精度高くやるんじゃないかなと思つてね。小学校低学年の子どもさんにそれ言えつていわれても、お互いのこと分らないからちよつとそれを要求するのは難しいような気はしますけど。そう意味で、その言語活動も要求できるレベルっていうのは発達の段階に依拠して、あるいは授業のねらいに依拠して、検討できることはいっぱいあるんじゃないかと。そんな感じでずっ

とお話をうかがってたんです。

司会

4つの話でした。細越先生、これまでのお話をききながら先生のお考えをお話してください。

『かわり方の指導』

(細越淳二先生)

はい。先生方のお話を伺いながら私が感じたのは、先生方が「かわり方の指導」をどのようにされているのか、ということについてです。

先生方は、単元の最初と最後、学期はじめと終わり、あるいは年度はじめと年度末など、スパンは様々だと思えますが、その中で先生方と子どもたち、子どもたち同士が円滑なかかわりをもてるようにするために多様な働きかけをされているのではないかと思います。それは体育授業だけではなく教室場面のことにものだと思えますが、この「かわり方」の確立や人間関係の形成というのは、豊かな言語活動を生み出して体

育的な成果をより確かなものにする上では不可欠な基盤になるものだと思います。ですので、子どもたちが自分の思いや反省、学習のポイントなどを言葉に出して伝えるベースになる「かわり方の指導」をどのようにされているのかについて、お伺いしたいと思っています。

司会

井口先生、先生のやってこられた実践の中で言語活動についていうものの取り組みなど話してください。

『言葉のかけ方について』
(井口幸恵先生)

子供たちからの引き出し方とか関わり方の指導は、体育全体で欠かせないと思つています。低学年では、まずは、共鳴するっていうか、「イエイ」って一緒に出来て喜ぶとか、見てあげてその規準が分かるものを用意してあげて出来た時には「イエイ」ってやるんだよって、それこそはじめは教えてあげてあげる、そこからだんだんみんながそうい

うことを言わなくても自然に出来るような、そういう手立てをとったりしています。あと失敗に対しての言葉がけなんかも。低学年は、自分が楽しく夢中になっちゃうので、そういう楽しむ、夢中になる教材を用意してあげること、あとは見あうような場を設けてあげて、はじめは「今の出来たよ」「マルだよ」「バツだよ」でいいと思うんです。この間授業を見に行った時に、低学年の子がマットからおっこちちゃう子がいました。なかなか出来ませんでした。その子が「〇〇ちゃんね、今日は出来ないけど、こないだは出来たんだよ」って言うって「だから今日も3回やればできるから」って言うって、そういうのを分かっている。そういう認め合っているのはとても素敵だなと思うながら見ていました。出来た時に喜んであげるとか、そういうのははじめに教えてあげる必要はあるんだなと感じてます。高学年では、いつでも、どこでも、誰とでもコミュニケーションをとれるのでい

ろんな子と組んだり、例えばこの子と組んだら出来なかったけど違う子と組んだらタイミングがあっちゃって出来ちゃったとかそういうことっていっぱいあると思うので、そういう関わりをなんかはすごく大事にしています。あと高学年では、「体育って、自分の体がどうなってるか、なかなか見えないよね」っていうことからお話をして、「苦手な子が出来ないのが見えちゃうけど、だけど、見てもらって、『こ、こうだよ』って言うってもらえると、いっぱい直せるよね」って話をして、「みんなで恥ずかしがらないでそういうのをどんなやつていこう」「出来な

いことは恥ずかしいことじゃないよ」っていつもはじめていきます。あと、チームのスポーツをつくる時なんかは、よく「あのチームいいなっていう子がいるけど、それ違うよね」って話をして、「そのいいチームについていうのは誰がつくっているの。」って話をして、「みんなが作ってるんだよ」って「そのチームの人が作って

るんだよね」って、「だから『自分のチームもいいチームにしよう』って思う子が集まれば、いいチームになるよね」っていう話をしながら、そのチームの関わり合い方なんかも指導しながら、こつちで意図しているものについていうのはなんとなく自然にやっています。次に、子どもたちの学習カードに『友達の良さを見つけろ』とか、『コツを見つけたら』とか、『出来た』とか、そういう感想をいつも書かせて掲示してあげて、関わりを良さと、技能の良さと、思考の良さっていうので色分けして、授業の始めにいつも「こないだこういうのがあったよ」って今日こうな

ってほしいなっていう姿を紹介していくような指導をしていると、子どもたちが終わりのころには書ききれないほど書いてくれたりとか、友達の良さをいっぱい見つけてくれたりとかするようになっていきます。逆に失敗に対しての言葉がけについていうのは、やっぱりきつい言葉を言っちゃう子とかもいますので、私もモデ

ルになるように、常に指導している時に、声かけて歩きます。「今のこうだったよね」「だからこう言ってあげるといいよね」って言うようにしてあげています。

低学年、高学年の具体的な話の中で、子どもたちにな話をつくってあげていく、そして、自分たちのものにしていく、そこから子どもが広げなっていくの、そういうお話であつたと思います。井口先生の話を受けながら、中学校ではどうなのでしょう。

『人との関わり方に関する指導』（八坂和典先生）中学生でも仲間との関わりはすごく大切な視点だと思っています。当然教師がモデルですから、よくできた場面とか、さまざまな場面です。そういう姿を示していくことが生徒にとって参考になる一ツかなと思います。また、例えば、武道の学習の中では、「礼に始まり礼に終わる」とよく言いますが、「相手が

いなければ稽古や練習はできないよね。自分をよりよく伸ばしてくれる相手を大切にしよう。」というような指導も欠かさずやりながら、常に仲間を大事にしているというスタンスを運動の特性と絡めながら、指導していくというやり方があると思います。チームを作るときも中学生くらいだと自分たちでつくる、となると好きな者同士っていう感覚も無きにしも非ずなので、これから先の学習を考えた時に自分たちの技能がしっかりと高まる、互いに頑張れるような雰囲気づくりをつくるように指導をします。一方的な指導ばかりなんですけども。あと、仲間と関わりあう中で、話す方も相手の気持ちをしっかりと伝えて話すということも大事なんですけど、話を聞く方も聞き方というところをしっかりと指導しないといけない関係はできないのかなと思ってます。しっかりと人の話を聞くっていう当たり前のことなんですけど、そういったことの指導も大切にしてい

ます。あまり、具体性はないのですが。

司会

中学校でも『聞き方をおさえて』ということはやはり大事ですか。

『聞くことの大切さ』

(八坂和典先生)

そうですね。言語活動にどう関わってくるかは分らないのですが、互いに教えあったり、話し合ったりする活動では、人の話をしっかりと聞くということがとても大切なような気がします。相手の話をしっかりと聞いて、自分にその言葉を落とした時に、今言っていることが何なのか考えますし、言葉と自分の感覚がつながらなければ、問い直したりという行動に繋がっていく気はするのですが、聞くっていうこともすごく大事な視点なのかなと思います。その中でいい関わりあいを作っていくというのが大事なのかなと思います。

『重要な教師の働きかけ』
(東文三先生)

貴生川小学校での研究の話です。

教師の働きかけを大事にしようということですが、それは、子どもへの一方的な投げかけではなく、双方向でやりとりしていくという相互作用を大事にすることです。タイミングのよい励まし、賞賛、それから動きをフィードバックさせる問い、逆にフィードバックをアドバイス、良い動きなどを実際に見せる、よい動きを紹介するなどの関わりをもつことが大切だということとです。また、子どもたち同士もそれをモデルにして関われるようになっていくことが大事になってきます。それらは、全体で集まって話をする全体指導の場面と、活動中に個別に関わる場面と二つあります。この両方を大事にしていかなければいけないという事を確認しました。

岡出先生のお話聞いて感じたことですが、全体指導では、教師が上手くできたときの感覚を子どもたちに伝えなければなりません。これが教師の大きな役割だ

と思いますが、活動中、よい動きの子どもを紹介しながら、その感覚を全体に広げることができるとよい授業につながるのでないかと思いました。個別指導の場合には、先ほど先生方もおっしゃったように、励ましたり共感したりする関わりを持つ中で、個に応じた声かけを大事にしていこうとが大切だと思います。

低学年の言語活動の例が一つあります。子どもたちは活動に夢中になり、お互いに声をかけ合えないということがあります。そこで、元気のでるカードというカードを活用した事例があります。「ピタツと止まりましたね。」などのコメントを書いたカードを、跳んでいる友だちの様子を見ていた子どもが渡すことによりできたことを伝えるという方法です。「協力して2人で一緒に跳べたね。」とか「工夫して楽しい渡り方ができたね。」など、教師がその時間に目標とする言葉かけをカードに書いて渡すことにより、ねらいを意識させることができます。これらのコ

メントを、自然に子ども同士言葉がけできるようになるとよいと思います。低学年の指導では、このような工夫が必要になってくると思います。



司会

ありがとうございます。それでは細越先生お願いします。

『単元の進行に伴う学習と指導』 (細越淳二先生)

ありがとうございます。今、東先生のお話では、どういう場面でどういう内容の働きかけをするのかという、教師の働きかけの言語的な内容について二つの次元があったかと思っています。そういうのをこちらであらかじめ1時間あるいは単

元を通して見通して準備できるかどうかというのも、一つのポイントになりそうですね。

おそらく、単元の前半の学習の流れや基礎的な動きが身につくまでの時間は、教師からの指導をヒントにしながら子どもたちは意見を言うのでしようけれども、中盤以降は基礎的なところを用いて自分の言葉で、あるいは互いに出し合ったアイデアでもっと発展させるという流れになっていくのだろうと思います。その時、教師としては、単元の後半になったら子どもたちの豊かな発想をひきとってどう広めるか、価値づけるかという働きかけになっていくというように、働きかけの内容や質も変わっていくのでしよう。

意味ある言語活動ということでは、時間の流れに応じた働きかけとそれに対応する子どもたちの言語活動の深まりというのを押さえておくポイントとしては重要だと考えます。働きかけという視点から言語活動のポイントを考えると。

『表現を通して内容の理解度と人間関係を変える』

(岡出美則先生)

さつき、聞き方の問題がありましたよね。子供さんたちの関係することに、こういう手続き入るってやっぱり言われています。例えば話してる方に顔向けなさいなど。その体育の授業だけでやることですか。という指摘は必ず出ると思うんですけれども、少なくとも話し合いをするときは、なんとなく話し合いしろよでは、たぶん聞いている子もいれば聞いてない子もいて、ある意味困るんですね。で、ちよつと領いてくれると、あ、自分が言ってることいいのかと受け止めてもらえると。そういう実感が出てきますよね。そういうのって、先ほどもお話ししたように、子供さんはいろんなところで身に付けたものをそのまま授業で持ち込んでくるので、なんら指導されないと学校の外のルールがそのまま入ってきてしまう。それは、授業でこちらが期待している成果だとするには、逆にボトルネ

ックになってしまふ類だと思うんですよ。そういう意味では、ちゃんと提案に対して賛同していることをサインで示してあげるとか、ウンっていつてあげるとか、顔向けとか。さつきからずーっとありますけども、人が成功したときに喜んであげるとか。この手のものは、やっぱり関係を作っているときにもすごく大事なことでと思います。先生もそのモデルっていう感じですよね。で、あと二つ。たぶん、ちよつと話を広げながらもつとお話し伺いたいなっていう風に思ったのは、子供さんいろいろな話を聞いたりすると、子供さんはいろんな言葉出したりしてきますよね。こちらがそんな言葉をとってなかなかたんだけども、なかなかいい表現だつてこちらが思うときあるじゃないですか。逆に、子供さんたちにそういうことを表現しろつて言わない限りは、こちらはそういう情報を貰えないわけですよ。表現っていうのは、そういう風にして、子供さんにある意味助けても

らいながら自分たちが教えるようにしていることの理解度も深められますし、指導のレパートリーも広げていくってんだと思います。教員が一人だけで育っていることは多分なくて、子供さんがいて、自分たちが育っている。そういうきつかけとして、こういう言語活動つてものをかなり意識して授業の中で展開されようとする、教師としての育ち方が変わっていくんじゃないかなと。そういうところを例えば、どう思ってるかっていうことですよね。で、二つ目は、最初のほうに話が出た、一応国語をベースにしてつていうお話もありましたけど、でも今のところで言えば、国語でやっていけるようなことを意識して体育の授業で使っているのかどうか。小学校の場合は、自分で国語でもできるし、いろんな教科を使つてできますね。国語の授業でこんなことやつてたよね、みたいなのはありますけど、中高の教員からすると、他の教科のところでどういう風にやってい

るのかつてなかなか見ることはないじゃないですか。だから、国語でこういうことをやっているから、お前たち国語で教えてもらったでしょ。今度使つてごらんよ、みたいなものつてなかなかしないのなつて気はするんですよ。でも、国語の教員と話することはある意味できるわけですよ。あるいは、他の教科の方たちと話することはできて、そういうことは実際にじゃあできるのか。全然無理だとは思わないですけど、なかなか現実のところでは展開されてないんじゃないかなつていう気はするんですよ。いわゆる国語を核にして云々みたいな話になつてくるには、現状どういう風にして動くんだろなつていう。逆にいうと、体育のところどころなんやつてますよつていう風に戻すことができれば、だいぶ環境も変わりますよね。それは学校でいうと、教員間の関係を変えていくきつかけにはなりますね。そういうところをどういう風にされているのかなつてのがあ

りますね。ご紹介していただければ嬉しいかなと思います。ながら聞いてました。

司会

子供たちの発した言葉を学習の中に使いながら進めていく、そんな具体的な例でもあれば八坂先生からお願いします。

『国語科とのかかわり』
(八坂和典先生)

生徒から出てくる言葉で、教員がハツとさせられるような言葉は数多くあると思います。例えばダンスの授業の中で、動きのイメージを生徒の言葉で捉えたものを集めて、他の仲間の参考になるように紹介したりよくします。他の種目でも、生徒から出てきた言葉を授業の中で紹介し、それがどのような感覚なのか、考えさせたり、質問させたりします。実際に生徒から出てきた言葉を私自身も授業の中で使わせてもらつたりもします。話を伺いながら、共感させられました。あと、国語との関係で言つてしまふと、はつきりいつて難し

いです。ただ、やはり国語の授業の中ではいろいろな問題に対して根拠を書かせたり、説明させたりという学習をやっているようなので、学年ごとに持っている能力については、教科の先生に聞いたりしながら、こちらの目安として参考にしています。実際、国語科でやっていることを、どうこつちへ引き取っているところまでは、私の今の状況の中では示せないのが現実です。今後どう関連させていくのか、自分自身の課題にはしたいなと思います。

司会

現実のところそうなんじゃないかなと思いますけども、井口さんどうですか。

『子どもの言葉を広げること』（井口幸恵先生）

若い先生たちが一番悩んでいるのは、教え合いのための資料をいっぱい持っています。その立派な資料を出してくるのですが、教え合いが実際に活発化しないということ。それはなぜか？というと、その中の

どこを見てあげたらいいとか、ここのこのポイントだけ、っていうのがない。難しい資料をもってきてるので、子供たちが使い方がわからないっていうようなことがあります。子供たちから言葉が広がらないなんてことがあると感じています。私も、マツト運動を教える時にどうしようってなったときに、子供たちがこのタイミングの時、「ここに手をつくのを、これ見てあげるんだよ」とか、やはりその場に行つてなるべく広げてあげていくと、子供たちは、「私はこのところを手がつけてるか見てあげるよ」って言うんだけど、「なんかポンッてこのときにやったら先生これできるようにになったよ」とか言うので「じゃあ見せて」と言うのと、回つていいタイミングの時に「ポン」って言うて、そこで、こう手ついて開脚前転ができるようになったりとか、そういうのを子供たちが自分たちで一生懸命試行錯誤しながら、この子をなんとかやらせたいっていうので、一生懸命や

っていることがよくあります。あと、私がよく言うのが、「得意な子は、苦手な子を好きにしてあげたらすごいね」という話をするのですが、そうすると、なんとか上手くしようと思って、言葉を試行錯誤して、倒立のうまい子が、その子に「マツトを掴むようにしてさ、ここ見てやるとうまくいくよ」とか、すぐく考えながら言葉を発していて、そういうのを私も貰つて子供たちに広めていくようにしています。そのタイミングとか使い方とかここを見ることが、子供たちが知ることと、それを知っている子供たちが広がっていくんだなという感じがしています。それから、国語ベースというのですが、うちの学校は今国語の校内研究をやっています。表現、思考力とその表現をやっている。聞き方ですが、聞いてあげるときに領いたり、「そう思う」っていう風に言うてあげるとか、わからないときには、「それってこういうことって言うてあげるんだよ」とか、「それってどうなの」

って聞き返してあげるとか、そういうことを国語の中で全学年でやっているんですが、やはりそういうのが、体育の中でも生きてくるなと思います。理論的なところという、国語の大学の教授が論理的思考でバタフライマップっていうのを教えてくれました。蝶々の羽を使って、現状があつて、それはどういう理由で、解決策を考えて、そして解決していくというような課題解決に使えるようなものでした。その先生が「これは体育だつて思いっきり使えるんだよ」と言いました。例えば、チームで困っているこの現状、どういう現状で、それはじゃあなんでそうなっているか、他のチームはどうしているか、とかそういう情報を集めて、「じゃあ自分たちは、こうしていいこう」っていうのは使えるよ、というお話でした。バスケットの授業をやつていて、なかなかできない子が、ちよつと自信をもって、伸びた時っていうのが、先ほど先生がおっしゃった上手いプレーの見方という、

スペースのこととか、そういう視点を与えてあげたことで、見てるときにそのチームにアドバイスをするような学習をしていたときに、この子の教え方がすごくよかったというので、他のチームから褒められました。その子が、そういう風に自分が言ったことで、動けるようになってきて、プレー自体も上手くなったこともありました。やはり、言葉で表現することから技能にいくことがあるなと思います。そういう子供たちの言葉を色々広げて、わかるようになると、プレーにもつながることが分かりました。

司会

さつきも出てたオノマトペのように小学校低学年の場合、感覚的な言葉が子供の中に一番入りやすいというようなこともあります。東先生、いかがでしょう。今までの話を踏まえながら。

『子どもたちと作る授業づくり』（東文三先生）
子どもたちに助けられた

ということについては、そのような授業になることが多いですね。逆に、子どもたちに助けられなかったら、よい授業にはならないというのはあると思います。やはり授業というのは、教師と子どもとが作り上げていくものと思って授業していただきますので、このことは大事な視点ではないかと思えます。ケーキが好きな子が、前に手を出す動作をするときに、「ケーキをつかんでいくようスーッと手を出せばいいのかな。」とつぶやきます。「そのような感じでしてみればいいのではないかな。」とその発言を生かした展開にすることがあります。

いろいろな動きをするとき、自分自身だったらどうするかという発言をうまく返すことができればよい授業になるのかなと思います。

それからもう一つは「聞くこと」の大切さです。現任校では、各教科における言語活動の充実をテーマに校内研究で取り組んでいますが、「聞くこと」が言語活動のスタートではないかというところで「上手な聞き方」

の掲示物を作成して全クラスに掲示しています。それをもとに、発達段階やクラスの実態に応じて学級目標を決めて取り組んでいます。聞く態度といったスキルのなこと、比べたり関連付けたりして聞くといったどのように考えて聞かかということに取り組んでいきたいと考えています。

『言語活動を通して理解することの重要性』

(岡出美則先生)

あの昔、岡山大にいた坂田さんって、国語の授業使ってたんですね。体育の教員ですけど。子供さんたちに、例えば跳び箱の授業とかマットの授業でどういう風にものを考えてるのかってのを書かせていく。絵で描かせるケースもあれば、例えば、グラウンドでサッカーやってる絵描いてご覧っていうと、ゴール前しか描かない。だから真ん中のスペースの意識が全然ないぞとかっていうことが、ある意味、絵からわかってしまふみたいなことがあったりとか。国語とリンクさせ

てたのが、今の説明文と一緒で、順序立てて書かすんですよね。今あなたの技はこれでどこができないの、どうしたらいいのみたいな。そういう要求をして書かせていくと、あるところが書けないとか、ここら辺の論理がすつ飛んでしまってるとか。そういうことが今度書かすことによって、こちらは子供さんのつまずきがわかってしまう。あるいは、逆にこういう風に意識して書きなつていうと、子供さんが今度言葉で埋めるようになって。すると、先ほどバスケットの話とかもありましたけど、言葉を獲得すると、それで今度見えてきてしまったりするので、実際技能を上げていくときなんかにも、特に上の学年の子供さんになれば、自覚するとわりと形にしやすい。子供さん、小さい子って、言ってることやってることと全然ずれたりしますけど、どう動いてるか自分でもわかんない。でも、上の学年の子になればなるほど、論理的に考えたことは、納得するとできていく。だから、

ら、大学生とかも鉄棒とか全然できなかった人にこういう動きでしよつていう風に指導して、動きを了解するとできてしまったりするんですね。何していかわかんない状態から、こういう風に動いてるってわかれれば、後まあ、採用試験の前とかで、これできない人っていう風に追い込まれていくっていうそういうのもありますけど、そこは論理がわかれれば動きにもついていきやすい年代の人達っていう意味では、言葉にさせるっていうのと同時に、全部は全部する必要はないと思いますが、書かせるとか、書かせ方とか。そういうことっていうのは、言語活動っていうことからすると大事だろうなと思います。で、体育理論とかは、中学校とか高校とかは、逆に、そういうところを詰めていけるようなものにもまたなっていくのかなって。そういう印象を持ちながら今お話を伺っていました。

はい。言語活動をより充実させるための視点として、私は「体育授業と学級経営のリンク」も大切だと考えています。肯定的な人間関係は、豊かな言語活動の基盤になることは間違いないのではないのでしょうか。私は、よい体育授業と肯定的な学級集団づくりをテーマに調査研究をしたり、先生方と実践研究をさせていただいたりしているのですが、体育授業と教室場面をうまく結びつけるということも、先生方が日常的に気にされていて、しかも非常に重要なことがらではないかと思っています。

現に先生方は、体育授業の中で子どもたちが課題を共有して取り組めるような教材を提供することともに、教室場面でも仲間を認め合える肯定的な学級集団にするための様々な工夫をされています。私が邪魔をさせていたのだいたある学級では、「ナイス」「ドンマイ」「ハイタッチ」をクラスの合い言葉にしていました。仲間がうまくできたときには「ナイス！」と言いな

していききたいですね。



司会

ら「ハイタッチ」、うまくいかなかった時には「ドンマイ」を大きな声で言い、常に子どもたちが仲間を意識できるような学級づくりがなされていました、この合言葉が教室場面を飛び出して体育授業でも使われ、より肯定的な関係を創っていく契機になる姿を見ることができました。八坂先生の授業の他のところで大事なことがあるっていうのも、つながる部分なのだろうと感じました。

体育授業と学級経営のつながりを考えますと、高橋健夫先生（日本体育大学）が示された授業づくりの基礎的条件（「学習規律の確立」「効果的なマネジメント」「肯定的な人間関係」「情緒的解放」）や河村茂雄先生（早稲田大学）が集団を成立させる条件として「ルール」と「リレーション」をあげられていることなどが基盤となつて、体育での意味ある学習が、豊かな言語活動とともに実現されるのだらうと思います。そういう先生方の取り組みを、もっと知りたいですし、共有

ありがとうございます。それでは、結びに言語活動についての実践と、今細越先生から出していただいた課題についてのお考えをお聞かせ下さい。

『言語活動の実践について』（八坂和典先生）

体育の言語活動のベースとなる学級活動といってもお示しできるものなどないですが、規律は大切であると考えています。その中でも先ほどから話をしてきましたが、聞くということに關してはしっかりと指導します。聞くことが原点というか、まずはそれができな

いと言語活動は成り立たないと思っています。あとは話し合い活動を充実させることでしょうか。体育の授業などと同じで考える視点等を与えながら、少人数のグループやペアなどの学習形態を作つて、その中で話し合わせ、さらに発表させながら共有をさせていく、当たり前のことなのですが、そういった当たり前のことをしっかりと通して行いながら自分の考えもしつかり伝えられる、さらにはそれをきちんと受け止められる、気持ちというの、学級のなかで育てていくことが大切であると思っています。また、人間関係が良好でなければ、言語活動もへつたくれもないような気がします。常にどこでもやられていると思うのですが、人間関係作りというのは、大事にしなければいけないですし、それが言語活動のみならず、様々な活動の根底になると感じています。そしてそのことは他教科以上に体育の学習場面に現れると思っています。

次に授業の実践ですが、

私が言語活動を授業に取り入れる際に大切であると思つているポイントとは十分な運動量を確保すること、学習で何をこの時間に身につけさせるのかということ、言語活動とは言われますが、あくまでも目標を達成させるための手立てであることを考え授業実践をしています。また先ほどから出ていますが、「わかる・できる・かかわる」授業を教師が工夫し実践していくことだと思つています。自分自身の最近の課題としては、バルココミュニケーションとよく言われますが、文脈にのせた言葉だけではなく、非言語的なノンバーバルな部分、ジェスチャーとかそういういたものも大切にしながら、教師が論じた言葉だけでなく、生徒から出てきた言葉も大切にし、言葉を介すことを手立てとして、目標が達成できる授業実践を目指しています。

次に、授業実践のことでありますが、一年生の柔道の授業で固め技の導入の例を紹介します。ほぼ全員が柔道の学習が初めてです。学習形

態は三人組です。三人の中で、一人は「受」といつていわゆる寝転がつて固められる役、「取」の固める役、あとは観察やアドバイスを出す役割を与えました。そして「仰向けに寝転がつている相手をどうやったら抑え込むことができますか」という教師からの発問をいくつかの条件のもと、生徒同士で考えさせ、授業を展開していきました。初めて柔道を経験する生徒たちばかりなので、全く分からない状況なのですが、どうやったら抑え込むことができるかを「こうだね、ああだね、ここを固めれば抑え込めそうだね」といった話し合いを通して、知恵を出し合い、お互いに言語を交え、体で表現しながら答えを考えていました。最終的には教師が、固め方を子供たちに発表させながら聞き取つて、固め技のポイントを具体的に生徒に指導し、実践させました。その学習をやつてみてよかったと思うところは、今までの私の技の指導はどちらかというと教えるだけの一斉指導が中

心でしたが、そこに生徒の思考を促し、考えさせることで、言葉を交わしながら主体的な活動の様子が見られました。さらに、一度自分たちで試行錯誤した経験が、教師側が指導した時に、知識の理解をより深めたように思いました。また、実際は「頭・胸・腕を固める」ただそれだけなのですが、今度それが違う技の学習になったときに、生徒がそこで得た知識をさらに活用しようという姿も見られて、学びの連続性を感じることができると思っています。どうしてもこちらが一方的に教えたがる、私などはそうなのですが、ちよつとそこで生徒に考えさせることで、言語活動も活発になり生徒が主体となる授業展開にもつながってきますし、知識もより深まった面白い授業だったなと自分では思っています。

大した実践ではないですが・・・

司会 中学校の授業の風景が見えてきたように思いますけれども、東先生、小学校から

見て今の話を受けていかがでしょうかね。

『子ども同士をつなぐ』
(東文三先生)

柔道の授業で3人組になって学習活動を進めていくというのはとてもいいと思います。小学校でも一人ひとりが意欲的に学習していますが、子ども同士の関わりが少ない授業があります。そうなりますと、動きの気付きやアドバイスなどが少ない授業になってしまいます。意図的なグループやペアを作り、グループ学習を進め、観察する人、測定する人、合図をする人、運動をする人など役割を決めて、学習を進めていく中でコミュニケーションが生まれ、いいアイデア、いい動きのヒントが出されるので意欲的な学習になります。このような学習形態を見習っていききたいです。

司会

井口先生、東京では結構そういう学習をよくやっていますけれども・・・

『情報のタイミングについて』
(井口幸恵先生)

面白いなと思って聞いてました。やはり、どうやってたのできるのかっていうところの思考を働かせることは、意欲につながるなと思います。初めから教えてしまおうと、そこで知りたくない情報が入ってきて、なかなか子供たちの頭の中に入りませんが、どうしてだろうって悩んでるところに、「あ、そっか」っていう知識がまた入ってくると、「あ、こうやってたらできそうだな」と、より意欲が高まったりしていきます。主体的にっていうのが出るんだろうと感じました。小学校で何を大事にしてきているかなって思うと、運動するに

子供たちはすぐ伸びるし、意欲にもなると感じました。さつきトリオでつてこともおっしゃってたんですが、やはり教えるってこととか、観察、見る目を育てるってこととか、自分がどんなふうにしたらできたのかっていうのを、意識させることが学習の中で重要だなと感じました。



司会 それでは石川先生お願いします。

『実践事例をうかがって①』
(石川泰成先生)

はい、様々な実践を聞かせていただき大変勉強になりました。気づいたことを、繰り返しになるかもしれませんが、子どもたちには、いかに、

言わせたり、書かせたりする活動を確保し質を高めることが重要ですね。そのためには、まず、何を目的に行わせるのかを明確にする必要があります。それに、先にも申し上げたとおり体育科・保健体育科の目標や指導内容を明確にすることであります。次に、そのための有効な手立て、学習活動等を考えるところ。技能、態度、知識、思考・判断の学習をバランスよく行い、指導の工夫を行うことが言語活動の充実に結びつくはずだと思います。

例えば、中学校・高等学校の体ほぐしの運動を例にすると、リーフレットでは、体ほぐしの運動を実際に行った後に、やってみてどうだった？やり始める前とやり終わった後、心や体がどのようにに変化した？ということ子どもたちから引き出す活動を提示しています。これも、子どもたちの実感を言語で表現させたり、カードに記述させることで、体ほぐしの運動の知識や思考・判断の学習のねらいに迫ろうとしている例だと思います。

うのです。目標や指導内容を明確にし、身に付ける手立てとして言語活動を充実させている具体例のように思います。

次に、中学校の場合、程度の指導内容として、仲間の学習を援助する、などがあります。仲間に助言する、教え合うなどの態度です。

助言するのですから、一般的には、言語において行いますね。態度をしつかり身につけさせる手立てとして、教え合いの質を高める必要があります。つまり、教え合う場を設定したり、教える意欲を高めることが重要です。そのための、教師の手立てを考えると、今、事例でお話していただいたように、まず助言する視点を示す、アドバイスカードを書いて渡す、そのアドバイスカードを貰ったときにどう思ったかというようなことを自分のノートにまとめさせるなどの活動が工夫されているわけですね。教師の指導の工夫により、言ったり書いたりすることを充実させ、子どもの助言する、教え合うという態度を育成

し、強化しているわけですね。教え方ナンバーワンは誰でしょう、みたいなことを書かせたりする例も拝見しました。評価の視点から見ると、態度の評価は主に教師の観察で行うのでしょうが、子供たちが誰誰君の教え方がとっても上手でした、のようなことが書いてあれば、それが評価の補助的な材料にもきつとなりますよね。教師が、自分の見方と一致しているとか、あの子は意外にも、よく教えてたり、仲間に関わってくれてるんだな、ということを確認したりもできますね。

三点目は、教師の関わり方の話で、直接言語活動の充実と関わらないのかも知れませんが、子どもたちに、言ったり、書かせたりするという視点で考えたとき、教師がしっかり指導することともに、「問う」という姿勢が大切なのかな、と感じています。やり終わってどんな感じ？ 何を考えてトライしてみたの？ そういう迫り方で子どもたちから言葉を引き出していくこと

はいかがでしょうか。先ほど、八坂先生の発言にありますが、中・高の先生はどちらかというと、何々ができるようにしよう、ここがポイントだから意識してがんばってみよう、的な迫り方が多いのかなあと思いました。どこを見ながらプレーした？ どこに力をいれてやってみたの？ など、子ども自身が自分を見つめたり、振り返ったりして、言ったり書いたりさせることは、地道な活動ではあると思いますが言語活動の充実につながるのでは、と思いました。こうした関わり方は、もしかすると、教師としてある程度の経験が必要になるのかも知れません。

②『実践事例をうかがって』(石川泰成先生) それを、各教科の特質に応じて重要なものをピックアップして行いましょうというの、よい実践だと思います。ある教科だけで言語活動の充実を全て担うわけでは無いはずですね。例えば、研究主任さんや教育課程を管理している教頭先生なら教育活動全体を通じてどのように関係性や各教科の特性、役割分担のようなものをもたせるのか考えようか。言語活動との関連で、国語科では具体的にどのような指導がなされるのか教師全員で理解した上で、各教科等での取組を明確にさせたり、総合的な学習の時間に、話し合いや意見交換のスキルを身につけさせたりする内容などを検討したりなど、学校の教育活動全体での関連を考える必要があると思います。体育科・保健体育科の授業においては、話合いのテーマを明確にするなどして、体を動かす機会を適切に確保することが大切であるという

ことを、学習指導要領解説等で示しています。体育科・保健体育科の特質を踏まえた上で言語活動を充実させるためにも、他の教科等との連携を図ることも重要だと思っています。

五項目。子どもたちの使っている言葉等に敏感であることも教師として大切だと思います。それは、教師が、子どもたちがピンとくるような言葉で語れなかったらおそらく授業は成立しないと思うからです。子どもたちがどのような言葉で会話し、思考しているのか、そういったことに敏感になり、授業づくりに積極的な生かしたりする取組が大切かな、と思っています。

例えば、跳び箱なら、運動の局面を、助走、踏切から第一局面、第二局面から着地など、分解写真とか図だけ示し、学習したそれぞれの局面のポイントを、自分の言葉で書き込んでおこうとか、それを使って説明してみよう、などの利用の仕方が考えられると思います。子どもたちの使っている言葉を確認したり、運動

の行い方のポイントを見つ
ける、など思考・判断の学
習状況を確認したりするな
どの利用方法もありますね。

最後六丁目、オノマトペ
のことについてご発言があ
りました。自分のこつなど
を自分の言葉でいうわけ
です、すよね、「シュッとやる」と
か、「ここでギョツと力を入
れて」とか。その表現の内
容自体は全然問題にする必
要はないと思うのですが、
あくまでもその子のコツ、
実感を言葉にするわけだ
よね。言われた子がそのま
ま受け取れるかどうか、
あまり問題にしない。ただ、
言われた子は、そうかし
れない、とか、それを頼り
にしてやってみよう、とい
うことになり、全く無駄な
ものではないはず。言
う方にとっては、自分の感
覚だとかコツだとかつてい
うようなものがあれば言い
たくなるわけだし、そのこ
とが仲間に助言するなど、
態度の育成上も有効である
と考えます。もちろん、先
生が示した3つのポイン
トについて助言してあげよ
う、という指導もあるでし

ようし、身体感覚が豊か
でなければ自分のコツだと
か言えない子もいると思う
のですが。それでも、中学
生、高校生ぐらいになった
ときには、自分はこんな感
じでやっているよつていう
助言の仕方面白いと思う
のです。そして、その感覚
を表現できるようにするに
はどうしたらよいのか、と
いうことが重要ですよ。仲
間の動きを見たときに、
あたかもその子に成りきつ
てその運動や動作等に共感
し、助言ができるようにな
るとよいなあと思います。
ああ、あの子はこの感じ
でやっているはずだ、とか
わかるような。助言する立
場の子どもの身体感覚の
豊かさをどう育んでいけば
いいのか、大変興味があり
ますね。

まとまりのない話でした
が、以上です。

『言語活動のおさえどころ』
(白旗和也先生)

先生方ありがとうございます。
感想も含めて、話
したいと思います。今回の
改訂では、小学校に英語活

動が入りました。英語はコ
ミュニケーションのツール
として大切ですが、実際
はそこまで英語を使えず、
自分がしゃべらなければな
らない英語をしやべると
精一杯で、思いを伝えると
ころまでなかなかいけませ
ん。自分が話すことが目的
になっていて思いを伝える
手段になっていない、相手
とのコミュニケーションの
道具になっていない状況が
一般的のように思います。
日本語を介する体育の授業
で考えた時にも、話し合い
活動すること自体が目的
になっているという授業と、
コミュニケーションをより
深めるための手段になって
いる言語活動とは決定的
に見えていて違いを感じます。
そこには、相手意識がある
んですね。生きた言語活動
には、相手意識がしっかり
押さえられています。

それから、言語活動では
思考を深めていくことが大
切ですから、その前提とし
て知識がないと話も深まり
ません。先ほどの英語では、
単語を知らないとなかなか
思いが伝えられないんです。

というのに似ていて、物を
考え、伝えるためには前提
となる知識をある程度子供
の中になく、深まりよう
がないのではないかと思
います。小学校の体育では、
「知識」という指導内容が
明確になっていませんが、
考えの前提として持つてお
くべき知識や情報は必要に
なると思うんですね。ただ
し、小学校は一般化できる
知識を求めると、逆に思考
が止まってしまいう可能性
もあります。小学生の思考に
あった知識や伝達の仕方を
大切にすることがあると思
っています。そのことでは、
先ほどから出ている「オノ
マトペ」という非常に感覚
的であったり、印象的であ
ったりする理解を大切にす
べきでしょう。そして、も
う一つ、小学生の場合には、
具体化が必要です。この具
体というのは経験に基づく
ことです。経験に基づいた
ことから知識を図ると子
どもにとってイメージでき
る使える知識になり、伝達
の手段にもなるのではない
でしょうか。中学校以降は、
内容として(3)「知識、思

考判断」になっています。
ここでは具体から徐々に抽
象に、経験から一般的で客
観的な知識に形が進化して
いくと思うのです。学習
指導要領上は誰にでも通じ
るような一般化されたもの
を知識として置いているの
で、小学生にも、思考する
上で必要な知識や情報はあ
るものの中学校の知識とは
一線を画しています。今日
の座談会で、井口さんにお
願いしたのは、多様な動き
をつくる運動のパンフレッ
トを作るときに実験台とし
て、授業をやってもらった
のですが、その時に子供が
発言したなわ跳びのコツの
説明がものすごく的を射て
いたというのか、子供だか
らあいう言いかたをして、
ああいう言いかたをしたから
他の子たちもすぐよくわ
かったんだという場面が
ビデオにあったんですね。
あれこそが生きた言語活動
だなと思った瞬間でした。

それから、自分の課題を
知るといことは言語活動
でも重要なポイントだと思
います。課題を知ることが、
自分を知ることです。それ

ものという感じです。コミ
ュニケーションや感性、
情緒に関することも、互
いの存在についての理解を
深めることは、チームづく
りそのものだと思います。
相手を尊重していくことや
感じたことを言葉にしたり
それらの言葉を交流したり
すること、言語活動が充
実していきますが、今日実
践で話していただいた良い
体育の授業はそれらが含ま
れているな思いますが聞い

ていました。ですから最初の話に戻りますが、よい体育の授業をしつかりと作っていくには、言語活動の充実が避けて通れないものとして含まれますので、言語活動だけを取り出して考えるのではなく、体育の授業の充実に向けての言語活動の位置づけとして考えていくとよいと思います。何といっても体育は唯一、一教科で、生きる力のすべてを育める教科ですから、木を見て森を見ずということのないように、生きる力の育成の要素の一つとして言語活動を捉えていただくとありがたいなと思います。以上

です。

司会

ありがとうございます。
後藤理事長、結びの御挨拶
をお願いします。

（理事長 後藤一彦）

長時間にわたりまして貴
重なご意見本当にありがと
うございます。本年度はペ
ーパーだけでなくネット
に載せてどなたからでも見
て頂けるように、そういう
仕組みにしていきたいと考
えております。本日は長時
間にわたってありがとうございます。

全国学校体育研究大会 近年度開催地のご案内

- 第51回全国学校体育研究大会（平成24年度）開催地 北海道 平成24年10月25・26日
- 第52回全国学校体育研究大会（平成25年度）開催地 東京都 平成25年11月14・15日
- 第53回全国学校体育研究大会（平成26年度）開催地 岐阜県
- 第54回全国学校体育研究大会（平成27年度）開催地 広島県

第五十回全国学校体育研究大会長野大会を終えて

第五十回全国学校体育研究大会長野大会実行委員会

会長 柳見沢 宏



ました。長野県は、信州であり、信濃の国です。第四十九回の福岡大会レセプション以来、おもてなしは「信濃の国」でと決めていました。

「つながっている」こと

3.11「東日本大震災」は、私にとって大きな衝撃でした。開会の挨拶でも話をさせてもらいましたが、私は福島の大学を出ています。東北地方には、

おもてなしの心

長野大会は、平成十七年に開催が決定し、「長野市体育学習指導研究会」が中心に、当時から動き出していました。『おもてなしの心』をどのように具現するか、それは、県歌「信濃の国」をどのようにアピールできるかにかかっていました。「おいらいえ 信濃の国」これは、開催前日のレセプションで掲げられたテーマでした。「ようこそ信濃の国にお越しいただきました。」そんな思いを、そして、開催できる喜びをお伝えし

い。そんな思いを強くもちました。復興に努められている方々の逞しさは、「つながり」があったからこそそのエネルギーだと確信しています。日本の全ての人たちが、我が事のように感じているのは、そこに「つながり」があるからだと思うのです。

サブテーマによせて

「長野大会」ではサブテーマを「わかる」「できる」「かわる」楽しさの提供」とし、特に「かわる」事を大切に授業づくりを進めてきました。このことは、昨年の東日本大震災からの学びとも言える重要な位置づけと考えていました。すでに告示されている「新学習指導要領」の完全実施が、小学校では昨年度から、中学校では今年度から、そして高等学校では、二十五年度からの年次実施となっています。この時期に「つながっている」ことの大切さを学び取るためにも「かわる」を基底にした授業

づくりをすることでした。その趣旨を踏まえた体育・保健体育の授業を全国の皆様に提案できる機会を頂きましたことに、改めて大きな意義を感じています。

あの時のシンポジウム

シンポジウムでは「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」がテーマとなり、今問われている大きな課題として示されていました。参加者の皆さんが、どのような食いつき方をされるのかに大変興味がありました。シンポジストの皆さんの的確な発表やコーディネーターのぶれない進行ぶりが印象に残っています。そして、会場の皆さんから日頃悩まれている現状が多く出され、双方向的に意見交換がなされていたことを嬉しく感じるとともに、あの時間が次の日の提案授業への参加へとつながったのだと思っています。魅力のあること、そこに何か求めるものがある時に人は食いつき、集客できることを改めて感じました。二日目の各会場への参加状況は不安な状況が払拭され、最後の研究協議会まで参加者が残り、日頃の実践をぶつけ合っていた姿に、本大会を通して県外

の方々との「大きなつながり」をつくれたことを実感しました。

長野市の体育人の結束

本大会の実施が決まって以来、組織力をどのように充実させるかが課題でした。長野市の体育人は目標ができた時の結束力には、強固なものがあるという確信をもっていました。不安を感じた時もありましたが、しかし、結果として見事にまとまり、自分たちの課題意識を共有し、研究部と運営部が連携し、つながりを深めながら本大会を終了でき、改めて関わっていただいたすべての方々に感謝を申し上げます。

最後になりましたが、長野大会を開催するにあたりお力添えをいただきました文部科学省、及び（財）日本学校体育研究連合会をはじめ、関係諸機関、講師、指導助言者の皆さまに厚く御礼を申し上げますとともに、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。「信濃の国へ、おいらいえ」ありがとうございました。

全国学校体育研究大会北海道大会を迎えるにあたって

第五十一回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

実行委員長 飯沼 晃



と話されていました。被災地の皆様に一日も早く、本当の笑顔が戻ることを願わずにはられません。

さて、平成に入って3度目となる「全国学校体育研究大会北海道大会」が、10月25日（木）と26日（金）に札幌市及び近郊の北広島市・恵庭市で開催されます。北海道の開拓と発展の中で、常に大きな役割を果たしてきた人口約百九十二万人を擁する札幌市は、冬季オリンピック札幌大会開催を機に観光都市として世界的に有名となりましたが、年間の降雪量が6メートルにも達する降雪地域に存在する大都市としても有名です。

今回の北海道大会は、新学習指導要領の趣旨はもとより、「仲間とのかかわりを通し、人間的な成長を促すための体育授業」を基本に

据え、全道が一体となって研究を重ねてきた成果を踏まえ、研究主題を「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」授業から日常へ、授業から未来へ」と設定させていた

できました。これは、発達段階を考慮し、心と体をより一体とした指導及び実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考えたからです。

その具現化に向け、北海道では、子どもたちに育てたい確かな体育の力、すなわち「技能（運動）」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせていくために、「①生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫、②児童、生徒が

協同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築、③児童、生徒の確かな学力を保障する指導と評価の充実」の3点を柱として授業を中心とした研究を積み上げてきました。1コマの授業を中核とし、子どもたちの日常に発展したり、次の学年や校種、将来につながることを意識した体育活動の充実を図ることにより、子どもたちに楽しく明るい生活を営む態度を育成することを目指したいと考えています。

ところであります。これまで、大会運営・授業研究等本大会開催に向け、文部科学省をはじめ（財）日本学校体育研究連合会、前年度開催の長野県実行委員会の皆様のご指導・ご助言をいただきながら準備を進めて参りました。

道産子の「運動を楽しむ姿」「運動に挑戦する姿」本気になって取り組む姿「伸びる・できる・わかるを実感する姿」を公開授業・保育を通してご覧いただき、その後の研究協議において、学校体育の充実の在り方について提案させていただきまします。ご参加の皆様より率直なご意見を頂戴できれば幸いです。どうぞよろしくお願ひします。

分科会授業の見どころ

第4分科会	園・学校名 札幌市立福住小学校
(分科会研究主題) 仲間との自分を見つめる学び合いで、「できる」喜びを味わう体育学習 (授業の見どころ) 私たちが目指しているのは、日常的に自ら体を動かそうとする子どもの育成です。休み時間に委員会主催のなわ跳び検定を行ったり、全学級に長なわやボールを配付したりするなど、授業と日常が行き来する工夫を行っています。	
公開授業領域→ 体づくり運動(6年)、器械・器具を使つての運動遊び(1年)	
指導助言者→東京学芸大学 水島 宏一	

第5分科会	園・学校名 札幌市立資生館小学校
(分科会研究主題) 「わかる」「できる」夢中になる体育学習～体を動かす心地よさや、動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～ (授業の見どころ) 資生館小学校の教育理念は「夢かなう学校」です。自分の願いや目標といった「夢」を自己実現していく喜びを子ども一人一人が実感できる授業を提案します。夢中になって動き、共に高め合つて学ぶ子どもの姿をご覧ください。	
公開授業領域→ 器械運動(6年)、ゲーム(2年)	
指導助言者→宮城教育大学 木下 英俊	

第6分科会	園・学校名 札幌市立上野幌中学校
(分科会研究主題) 未来へつなげる保健体育学習～自ら、仲間と高め合いながら、心と体をはぐくむ生徒の育成～ (授業の見どころ) 柔道の授業では、全生徒が「なぜ、投げることができるか」がわかる授業を目指しています。技のポイントを探究する生徒の姿に注目してください。ダンスの授業では、グループで創作したダンスの「おわり」の部分が交流を通して、どのように変化していくかをご覧ください。	
公開授業領域→武道(2年)、ダンス(3年)	
指導助言者→ 東海大学 中村 なおみ	

第1分科会	園・学校名 札幌市立白楊幼稚園
(分科会研究主題) 遊びを中心とした生活の中で幼児期にはぐくみたい力とは ～たくましい心と体を育てるために～ (授業の見どころ) 体を動かす楽しさや心地よさを存分に感じられる環境構成の工夫や教師の積極的な働き掛け、援助を図ることで、幼児が「友達と一緒にだから楽しい。」「もっとやってみよう!」と自ら夢中になって活動する保育を目指しています。	
公開授業領域→心と体を動かしながら楽しむ遊び、学級活動	
指導助言者→札幌学院大学 大垣 清美	

第2分科会	園・学校名 札幌市立白楊小学校
(分科会研究主題) 楽しさがある!共に学ぶ!伸びがある!体育学習 ～今こそ確かな体育の力を!～ (授業の見どころ) 1年生のゲーム「宝取り鬼」では、腰につけたしっぽを鬼にとられないためにどう動けばよいかを考えていきます。4年生の体づくり運動では、ボールを使い、条件を変化させて工夫する場面や動きの問題解決をする場面を公開します。	
公開授業領域→ ゲーム(1年)、体づくり運動(4年)	
指導助言者 → 宮崎大学 三輪 佳見	

第3分科会	園・学校名 札幌市立宮の森小学校
(分科会研究主題) 何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う体育学習 (授業の見どころ) 3年生の「幅跳び」では、上方向への踏み切りに着目し、その良さを実感する全体交流を予定しています。6年生の「フラグフットボール」では、仲間の特徴に応じた作戦を成功させるために、チームで交流を重ねる姿を見ていただきたいと思います。	
公開授業領域→ 走・跳の運動(3年)、ボール運動ゴール型(6年)	
指導助言者→北海道教育大学 城後 豊	

第 1 0 分科会	園・学校名 北海道北広島 高等学校
(分科会研究主題) 仲間と共にスポーツの楽しさに触れ、知的に理解することを通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質をはぐくむ体育学習の追求 ～新学習指導要領の先行実施を通して～ (授業の見どころ) 仲間との言語活動の充実を通して、論理的思考力などの体育の学力を伸ばし、教材や学習形態の工夫から生徒の関心を高め、仲間と共に学ぶ楽しさやその効果などを理解する体育学習を目指します。	
公開授業領域→体育理論 (1 年)、創作ダンス (2 年)	
指導助言者 →早稲田大学 友添 秀則	

第 1 1 分科会	園・学校名 北海道札幌市 立豊明高等養護学校
(分科会研究主題) 生徒が主体的に取り組むための学習と支援のあり方 ～円滑な社会活動を行うための知識の獲得と実践力の育成～ (授業の見どころ) 授業公開では、社会生活上、極めて大切な「体力づくり」、思春期の問題を未然に防ぐための「性の指導」、そして、会話を通し、豊かな楽しみをもつための「室内グラウンドゴルフ」を卒業後の生活も見据えて学習します。	
公開授業領域→ 性の指導 (1 年)、球技 (2 年)	
指導助言者 →北海道教育大学 安井 友康	

第 7 分科会	園・学校名 札幌市立月寒 中学校
(分科会研究主題) 「わかる」「できる」楽しさを味わう授業のあり方 ～仲間と関わりながら、健やかな心と体をはぐくむ～ (授業の見どころ) 体育理論の授業では、資料をもとに、グループによる話し合い活動を通して、新しい気付きを見出す授業を目指します。また、球技の授業では、生徒全員が「わかる」「できる」楽しさを味わい、生き生きと意欲的に運動に取り組む授業を目指します。	
公開授業領域→体育理論 (1 年)、球技 (2 年)	
指導助言者 → 国土館大学 田原 淳子	

第 8 分科会	園・学校名 札幌市立向陵 中学校
(分科会研究主題) 仲間とともに学び合う保健体育学習 (授業の見どころ) 跳び箱運動の練習の中で、称賛や助言、補助を行うなど、生徒同士が関わりながら、目標達成を目指す場を作りたいと考えています。「ボールを使った運動をいかに音楽に合わせて創るか。」そこに「巧みさ」を求め、明るく、楽しい授業を目指します。	
公開授業領域→器械運動 (1 年)、体づくり運動 (1 年)	
指導助言者→北海道教育大学 古川 善夫	

第 9 分科会	園・学校名 北海道恵庭南 高等学校
(分科会研究主題) 運動好きな生徒を育て、豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習 ～仲間と共に心と体をはぐくむ「体づくり運動」と「剣道」の実践～ (授業の見どころ) 楽しく体を動かし、仲間と協力したり考えたりしながら、自己の体力を向上させる「体づくり運動」、新しい発想から剣道の堅いイメージを変え、生徒たちが楽しく積極的に生き生きと活動する「剣道」の授業展開をご覧ください。	
公開授業領域→体づくり運動 (1 年)、剣道 (2 年)	
指導助言者 → 東海大学 小澤 治夫	

平成二十四年度全国学校体育実技指導者講習会

■実技内容のポイント■

幼稚園・保育園の部

「子どもたちが力いっぱい遊べる環境づくりと運動遊び」

①保育者の健康な身体を保つための運動とポイント

保育者は仕事柄、筋肉のアンバランス・体の歪みから生じる腰痛・肩こりに苦しむ人が多い。身体軸を意識した姿勢の矯正、筋均衡を保つ筋トレについて学ぶ。（加来明子先生 都立北多摩看護専門学校非常勤講師）

②運動遊びを豊かにする、モデルとしての保育者の役割 保育者の言葉は、幼児たちに多様な運動イメージを膨らませ、形を起し、運動に夢中にさせる力がある。指導者は創造的でありたい。「トンネルくぐり」仲間とつくる体のジャングルジム↓がダイナミックな活動へ。個のリズム打ち↓他者との

複合↓動きが伴うと、仲間と一体感を高める活動へ。」運動の自由性と楽しさを体験。（藤島八重子先生 藤島新体操教室主幹）

③親子の運動遊びは、親子の心とからだを育てる。子どもにとって、親を独り占めできる親子の運動遊びは育児力を高める最良の環境。運動欲求・悦びの変容を「走る」運動から紹介。（田中美智子先生 飯田女子短期大学非常勤講師）

選択講座 一〜二歳児の運動観察と支援 事例から好まれる遊びの魅力を確認し合い、その後の運動意欲・方向性を討議。（田中美智子先生 前記）

選択講座 三〜五歳児の運動観察と支援 園で活発に遊べる幼児も、親との遊びは何よりも満たされて楽しい。お奨めの家

庭での遊びを紹介。（井上アヤ子先生 創価大学教育学部教授）

④自然を取り入れた運動環境の構成 自然の中で感じ取ったことを大切に持ち帰れば、それは生活の中に新たな遊びを生み出す源となる。展開例を体験。（遠藤知里先生 常葉学園短期大学講師）



小学校の部 7月30日（月）

①水泳「水泳の楽しさや喜びを味わう実技研修」をテーマとした講習であった。

準備運動の段階から、実技内容の意味づけがなされた。指導の順が児童の学習の順にもなっており、明日からの授業に、すぐに使える展開であった。中でも、「け伸びの指導のポイント」について、立つ、潜る、蹴るなどの局面において、どの局面を重点的に指導することが大切かを学ぶことができた。クロール、平泳ぎにつながる大切な伸びです。



子どもたちにも、じっくり考えながらポイントを指導していきたい。
○講師・東京学芸大学教授 柴田義晴先生

②タグラグビー

はじめに、「タグラグビー」の内容と、その展開をする上での課題、その対応の仕方について、研究実践に基づいた講義があった。いわば『小学校の体育学習におけるタグラグビーの可能性について』と題する講義である。続いて「チーム対抗タグとり鬼」4対4のゲームなどの実技を行った。これまでボール運動を指導する際に課題と感じていた「全員参加」が、「タグラグビー」では運動が苦手な児童も参加しやすい、やさしいゲームであるとい

うことを学べた。受講者の感想には『早速実践したいという気持ちになりました。』との記述がいくつも見られた。

○講師…東京学芸大学准教授 鈴木 秀人先生



小学校の部 7月31日(火)

①陸上運動

準備運動の段階から主運動につながる実技であった。中でも、投の運動につながる『振り子投げ』『ふり返り投げ』『足元のダンボールをまたぎ越し投げ』は、体重移動を自然に身に付けられる工夫がなされていた。幅跳びでは、九歩、十一歩、十三歩の助走をリズムを声に出しながら実施した。講師の示範は、受講者が息をのむほど滞空時間があり、

幅跳びの魅力をつつりと味わうことができた。受講生から『子どもに伝える技能のポイント(スタートの姿勢目線、腕の振り方)を自ら示範を示して教えてくれ、子どもにすぐに伝えた。』との感想があった。

○講師…国士舘大学教授 池田延行先生



②表現運動

動きやすく、イメージが湧くテーマ『たいへんだ!』を選んでもくれた。また、最初は止まったポーズ、それに合わせて次のポーズへと、止まった動きから入った。身体的コミュニケーションづくりともいえる実技内容であった。毎回、受講生の課題にあった実技講習の展開を工夫している。いつも

互いの動きを見合う中で自然に拍手が起こる講習会である。受講生から『初めて出合った先生方とコミュニケーションを取りながらアイデアを出し合っているいろいろな動きづくりを楽しめた。』との感想があった。

○講師…国分寺第七小学校長 長津 芳先生



※両日とも会場は東京都千代田区立昌平小学校である



中・高等学校兼特別支援学校対象の部

柔道講師…

小宮徳健先生(教育庁指導部指導企画課統括指導主事)・

宮本乙女先生(お茶の水女子大学付属中学校教諭)

ダンス講師…

中村なおみ先生(東海大学体育学部体育学科准教授)

佐藤吉高(お茶の水女子大学付属中学校教諭)

岡本和隆(港区立御成門中学校教諭)

講習会の趣旨は、男女必修となる「武道・柔道」「ダンス」における課題解決及び指導技術の向上を図るとともに充実・発展を目指すこととした。

「武道・柔道」の指導を「安全に楽しく」行うためのキーワード何度も生徒に問いかけ意識付けの大切さを学んだ。指導の工夫について発想の転換が重要と捉えた。①技にこだわらない②生徒に考えさせる③安全を技能の中核に置く④授業の全体像を描く、の4点を指導の軸とし、具体的には「仰向け・脚が絡まない・

正対」を条件とした固め技の工夫が、けさ固め・上四方固め・横四方固めに発展することに気づかせた。また、まわし技系では、軸となる足やつり手位置から、大腰・体落としに発展することを学んだ。



「ダンス」では男子も含む学習として「ダイナミック・ユニーク・アバウト」を大事に指導することを学んだ。指導の工夫について、①仲間と出逢おう②オリエンテーションとリズムに乗って踊ってみよう③ものを手がかりに「人の流れの動き」の体験④「走る―止まる―」集まる―飛び散る―⑤「スポーツ名場面集」の5点を指導の軸とし、互いに協力して行う体ほぐし運

動を取り入れ「ダンスⅡ集
団学習」を確認した。また、
新聞紙や日常の場
面を想定しながら、リズム
をつけ表現することがダン
スに発展することを学んだ。



日時… 8月3日（金）午前
八時三十分～午後五時

会場… 港区立御成門中学校
体育館

平成二十四年度 足元からの健康づくり『足育』の推進について

学校では、靴の正しい履き方や選び方、あるいは足の大切さを教える場面をあまり見受けられない。家庭の役割として位置づけられてきたように思える。その影響もあって、多くの児童・生徒の間に、『足のトラブル』という健康や安全面でおざなりにできない実態が明らかになり、新たな課題としてその対応が求められている。そこで、健康教育の一つとして足や靴の正しい知識とその重要性の理解を図る必要があると考え、足元からの健康教育を『足育（あしいく）』と名付け、教育内容として学習指導要領に即しながら具体的にその対応策の研究を進めてきた。

一、初年次（平成23年度）
 足育の考え方、授業の進め方を体育科『体づくり運動』を通して実証した。また、授業内容を明確化するために、裸足での感触、運動を通して足指や土踏まずの感覚などを実技を通して確かめた。実証授業は、足立区立五反野小学

校一年生を対象として、平成23年12月1日（木）武田千恵子教諭が行った。
 足育の考え方、目標を実現するために、今回は体づくり運動の『多様な動きをつくる運動遊び』において、授業の中でどのような内容を取り入れられるかを考え、検証することにした。

① 足育との関連について
 多くの動きを経験する『多様な動きをつくる運動遊び』の中で、次の運動については、足や足指に関する動きを扱ったり動かし方に気付かせる活動を取り入れやすいと考えた。

○力の試しの運動遊び
 ○体を移動する運動遊び
 ○児童が運動を通して足や足指の動きに気付く（そうか！）、
 他の運動においても足や足指の動きを考えながら取り組むことでよりよく体を動かせることを理解する（そうだ！）。さらに中学

年での多様な動きをつくる運動、高学年での体力を高める運動などにおいても、足や足指の動きに着目しながら運動に取り組む（そうしよう！）ことで、体力の向上につながると考えた。

② 留意点について
 ○足指を十分に動かす運動内容を取り入れる。その際、児童が「おもしろい」「またやってみたい」と感じ、運動に引き込まれていくような内容を工夫する。こうしたことで、日常化を図るとともに足のよりよい発達形成につながるようにしていく。

○裸足で行う場面を設定し、足の感覚や心地よさを味わうようにする。その際、足を痛めないように運動内容の選択や場の設定等の安全面に配慮する。

○授業のはじめにおいて、足について観察したり足指を使った運動を行ったりする。特に、授業の終わりにおいて、足や足指について気付いたことを振り返った

り、靴の正しい履き方を学ばせる。このように一時間の授業を組み立てることで、足についての気付きを促したり深めたりすることができるとする。

二、二年次（平成24年度）
 本年度は、体育科における足育の授業の実践を重ねるとともに、足育全体計画を作成し、小学校の教育活動全体を通して行えるものであることを明らかにすることとした。

その研究過程で、特別活動の学級活動（保健指導）において、発達段階を考慮しながら低、中、高学年で年間各一時間計上して実施することとして、実施計画を作成した。

なお、保健指導に当たっては、その時間の在り方として、理解し、実践できることをねらいとする。また、『今の自分の生活にかかわりがあること』『科学的な裏付けがあること』『実践的な理解ができること』

をとおさえる。さらに、初年度実施した体育科体づくり運動で明らかにした移動、バランスなどとの関連を考慮しながら『姿勢』『土踏まずの形成』『靴の履き方・選び方』をおさえる。

なお、次頁以降に足育全体計画と保健指導の指導案（低・中・高学年用）を掲載した。実証授業は、十一月以降に実施する予定である。

三、足育指導資料作成委員
 内木 勉（練馬区立大泉西小学校副校長）
 眞砂野裕（昭島市立拝島第一小学校副校長）
 関口亮治（足立区立新田小学校主幹教諭）
 吉川則久（奥多摩町立古里小学校主幹教諭）
 難波誠二（前練馬区立高松小学校主幹教諭）
 武田千恵子（足立区立五反野小学校主任教諭）

足育全体計画(案)

○子どもの実態
○保護者・地域の実態

学 校 教 育 目 標

○学習指導要領



足育に関する指導の目標

日常的に学校や家庭で足の大切さ、適切な靴の履き方や選び方など足の健康の理解を通して、生涯にわたって楽しく明るい生活を営む態度を育てる。



幼稚園 保育園 幼稚園・保育園 との連携に関する方針など	各学年の足育に関する指導の目標			中学校 中学校との連携に関する方針など
	低学年	中学年	高学年	
	足や足指に着目した様々な活動を行うことによって、正しい歩き方がわかる。	自分の足や体の状態について知り、足の大切さがわかる。	足と体や心との関係がわかり、正しい生活の仕方や靴の選び方を実践できる。	

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
教科との関連	体育 運動領域	体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び		体づくり運動 多様な動きをつくる運動		体づくり運動 体ほぐしの運動	
	体育 保健領域			毎日の生活と健康	育ちゆく体とわたし	心の健康 けがの防止	病気の予防
	理科				人の体のつくりと運動		
	生活科	(2) 自分でできること (9) 成長を振り返ろう					
	家庭科					快適な衣服と住まい	

			4月 5月 6月	7月 8月 9月	10月 11月 12月	1月 2月 3月
特別活動	学級活動 (2) 日常生活や学習への適応及び健康安全 イ 基本的な生活習慣の形成 カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成	低学年	○正しい姿勢、靴の履き方と歩き方			
		中学年		○土ふまぜの役割		
		高学年			○自分の足に合った靴や靴の履き方	
	全校一斉指導など		○正しい姿勢、歩き方、体育時の正しい身なり(体育朝会)	○生活習慣調査(生活指導)	○持久走週間	
	学校行事		○定期健康診断 ○体力テスト○足長の計測		○計測	○計測
	児童会活動			○保健委員会アンケート		

総合的な学習の時間			3年	4年	5年	6年
道徳教育	1・2年 1－(1) 規則正しい生活		3・4年 1－(1) 節度のある生活		5・6年 1－(1) 節度・節制 2－(1) 礼儀 4－(7) 伝統・文化 4－(8) 国際理解	
学級経営 個別相談指導及び取り組み方	○保護者からの申し出、定期健康診断など、日常生活の様子などから個別相談指導が必要な児童を対象に実施する。 ○関係教職員との連携、校内の指導体制等についても記述する。					
家庭・地域との連携	○学校便り ○保健便り ○足育便り ○学校保健委員会 ○足育講演会 学校を中心として、足元から子どもたちの健康を考える契機とする。また、靴が我が子にフィットしているかという点から家族の話し合いを盛り上げ、ひいては健康そのものをふり返る。					

特別活動（学級活動）の授業計画（低学年）（案）

【指導内容：正しい生活の仕方や靴選びについての理解（正しい姿勢、靴のはき方と歩き方）】

○自分の靴の形に関心をもつことができる。（関・意・態）

○靴のはき方と運動のしやすさの関係について考えることができる。（思・判）

○靴を正しく履くことができる。（知・理）】

◎正しい姿勢・靴のはき方・歩き方が健康につながることを理解できるようにする。

学習活動	○支援 ●評価 ☆足育指導に関する留意点
1 正しい姿勢について考える。 （１）立位について Ｔ「どちらがよい姿勢ですか？」 ①背筋を伸ばしている、伸ばしていない ②両足に体重が乗っている、片足に乗っている （２）座位について Ｔ「どちらがよい姿勢ですか？」 ①背筋を伸ばしている、伸ばしていない ②体幹で上体を支えている、肘をつき支えていない （３）正しい姿勢を実際に行い、確かめる。 【そうか←→そうだ】 （４）靴の履き方との関連について Ｔ「これはどうでしょう？」 ①靴を正しく履いて立っている、靴を正しく履いていない	○電子黒板などのＩＣＴを活用し、クイズ形式で考えさせる。 ○２枚のイラストを比較して考えさせる。 ○なぜか、理由について考え、話し合い、その中で「そうか・そうだ」の段階を踏むようにする。 ○だれないように、テンポ・リズムに気を付ける。 ○正しい靴の履き方に意識を向けさせていく。
2 正しい靴の履き方について考える。 （１）正しい靴の履き方について考える。 Ｔ「みんなは靴を正しく履いているかな？これは、どちらが正しい靴の履き方だと思いますか？」 ①きつい靴、ゆるい靴 ②ひもをしっかりと結んでいない （２）自分の上履きが正しく履けているか、足に合っているか確かめる。 【そうか←→そうだ】	○正しい靴の履き方について、姿勢と同様に、２枚のイラストを比較して考えさせる。 ○正しい靴の履き方のポイントを知らせる。 ・踵を合わせて履く。 ・ファスナーやひもをしっかりと締める。 ●靴の正しい履き方が分かる。
3 正しい姿勢、靴の履き方、歩き方の生活習慣を身に付けることの大切さについて知る。 ○学習の感想を書き、ふり返る。 【そうしよう】	○紙芝居で説明する。 ・靴を正しく履くと足指がよく動き、足の健康につながる。 ○足の清潔、靴下や、上履きの洗濯についても触れる。 ●健康に生活するためには、姿勢や靴の履き方や歩き方が大切なことが分かり、生活の中で実践しようとする意欲をもつ。

特別活動（学級活動）の授業計画（中学年）（案）

【指導内容：足の大切さについての理解（足からの健康 土ふまずの役割）】

○自分の足や体の様子と、健康とのつながりに関心をもつことができる。（関・意・態）

○自分の足や体の様子を調べる中で、健康とのつながりを考えることができる。（思・判）

○足の仕組みと体の健康との関係が分かる。（知・理）】

◎土踏まずの役割について考え、足のよりよい発達と健康について理解できるようにする。

学習活動	○支援 ●評価 ☆足育指導に関する留意点
1 人間の足と動物の足の骨の写真を見て、どちらが人間の足か考える。 T「どちらが人間の足の骨でしょう？」 2 人間と動物の足の違いについて考える。 T「人間とサルの足の骨を比べて、分かったこと、考えたこと、思ったことを書きましよう。」 C「人間の足は踵が大きい。」 C「サルはまっすぐで、人間は曲がっている。」【そうか】 3 土ふまずの役割について考える。 T「このように曲がっているのは土ふまずと言います。どうして人間には土ふまずがあるのでしょうか？」 C「土ふまずによって、うまく立てるんだ。」【そうだ】 4 足のよりよい発達について知る。 (1) 足指ジャンケン、いも虫歩きなどの体験をする。 (2) 学習の感想を書き、ふり返る。 【そうしよう】	○電子黒板などのICTを活用し、クイズ形式で考えさせる。 ☆理科「動物の体と運動」の学習を想起させる。 ○分かったこと、考えたこと、思ったことを学習シートに書かせる。 ○児童の気付きから、土ふまずの役割に焦点化させていく。 ・いろいろな動物の写真を見せ、人間特有の形を理解させる。 ○三脚の実験から、土ふまずによってバランスをとっていること、二足歩行ができることに気付かせていく。 ○アーチ橋の仕組みについて知らせ、理解を深めさせる。 ●土踏まずの仕組みや役割について分かる。 ○身近な運動の体験を行い、日常の実践につなげるようにする。 ○靴をはいたときに、足指がよく動かせるか日常をふり返らせる。 ●自分の足と健康とのつながりに関心をもち、生活をよりよくしようとする意欲をもつことができる。

特別活動（学級活動）の授業計画（高学年）（案）

（2）日常の生活や学習への適応及び健康安全 カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

1 本時のねらい

- ☆自分の履いている靴が足に合っているかどうかを考え、適切な靴選びに関心をもつ。（そうか・そうだ）
- ☆自分に適切な靴の選び方が分かり、これからの生活に活かしていこうとする。（そうしよう）

2 本時の展開

	学習活動	○教師の支援 ◆評価 ☆足育指導に関する留意点
そうか！ 10分	1 学習のめあてを知る。	○予め作っていた一人一人の足型を提示し、足の形と上履きの関係に興味をもたせる。
	自分が履いている上履きが、足に合っているかどうか調べよう 2 自分の上履きと足の関係について調べる。 ○足型を自分の上履きに入れてみて、足が上履きの中でどのようなになっているかを見る。 ・前に詰めて、踵の余裕がどの位あるのか測る。 ・左右はどの位余裕があるのかを観察する。 ・調べてみて感じたことを、ワークシートに記入する。 ○分かったことを発表し合う。 ・上履きの中で、足型がぐらぐら動いた。 ・なかなか入らなかった。 ・指のつけ根の辺りがきつかった。 ・今の上履きでは、足によくないのではないかな。	○机上に新聞紙などを広げ、その上で作業させる。 ☆上履きの中に足型を入れるだけでなく、動かしてみたり定規で余裕を測ってみたりするように声をかける。 ☆上履きの中で足がどのような状態なのか想起させる。 ○事前のアンケートを活用し、自分達の意識と適切な上履きの違いを実感させる。 ◆自分の履いている上履きが、足に合っているかどうか調べている。
そうだ！ 30分	4 足の話 ○自分の足に合った上履きはどのようなものなのかを理解する。 ・JESの方にお話を聞く。 or 資料を見ながら、教師の話聞く。 5 自分の足に合った上履きはどのようなものか調べる。 ○話や資料から、どの位余裕があればよいのかを調べる。 ○適切な靴に、自分の足を合わせてみる。 ・JESの方に上履きを用意していただき、実際に試し履きしてみる。 ・友達の上履きに、自分の足型を入れてみて試してみる。	○「足の健康と靴のしおり」や「わかりやすい子どもの足とはき物の話」から抜粋して、資料を作成する。 ☆試し履きができるのならば、歩いてみて今まで履いていた上履きとの違いを考えさせる。 ○児童の上履きのサイズを予め聞いて掲示し、自分が試したいサイズを持っている子に頼むようにする。 ◆自分の足に合った上履きを見つけている。
	6 学習を振り返る。 ○今日分かったことと、これからどうしていきたいかをワークシートに書く。 ○書いたことを発表し合う。	☆今日の学習をこれからどう活かしていくかという視点で書くように声をかける。 ◆自分の靴の選び方について振り返り、これからの生活の中で適切に選ぼうとしている。（ワークシート、発言）
そうしよう！ 5分		

平成23年度 個人賛助会員

個人賛助会員(2万円)

大分県	岡野 忠雄
-----	-------

個人賛助会員(1万円)

北海道	新村 治
青森県	齋藤 三千義
岩手県	佐々木 繁
	新沼 良治
	高橋 光彦
秋田県	毛利 博信
山形県	板垣 正明
茨城県	大津 辰夫
	永長 潔
	吉田 克吉
栃木県	森島 堅二
群馬県	井上 哲男
埼玉県	片桐 雅章
	阿部 博之
千葉県	押尾 良晴
	清水 龍夫
東京都	真如 昌美
	齋藤 辰雄
	木室 忠明

東京都	関 順子
	薄井 和久
	関 毅彦
神奈川県	木下 泰雄
	馬場 正徳
新潟県	佐藤 修一
	金子 博之
富山県	中野 登
石川県	中川 法次郎
	蔵前 賢次
福井県	片山 正徳
	河合 誠
岐阜県	増田 義彦
静岡県	小林 弘直
	中山 友男
	植田 質
山梨県	長田 和人
	市村 一司
愛知県	森 茂巳
	佐藤 輝雄
大阪府	畑 光行
	吉川 章二

大阪府	村井 利彦
	中尾 俊治
兵庫県	澁谷 智昭
奈良県	増田 辰夫
	中田 正信
島根県	山口 克秀
	宮本 輝雄
広島県	岡本 秀隆
	才谷 利史
	空間 浩道
徳島県	福岡 俊和
	藤本 繁
香川県	鈴木 俊彦
佐賀県	塚原 康弘
長崎県	岩瀬 保博
熊本県	庄山 隆雄
	秀島 史孝
大分県	奥村 光範
	津田 政史
鹿児島県	上田 敏也
	澤田 元
沖縄県	眞喜志 康春

特別賛助会員

[児島株式会社](#)

[日本教育シューズ協議会](#)

[教育シューズ振興会](#)

[株式会社学研教育みらい](#)

[学校体育シューズ研究会](#) ((株) アスティコ)・(協和 (株))

[株式会社大修館書店](#)

[フットマーク株式会社](#)

[株式会社第一学習社](#)

[日進ゴム株式会社](#)

[株式会社光文書院](#)

[東京書籍株式会社](#)

[大日本図書株式会社](#)

[株式会社ワコール](#)

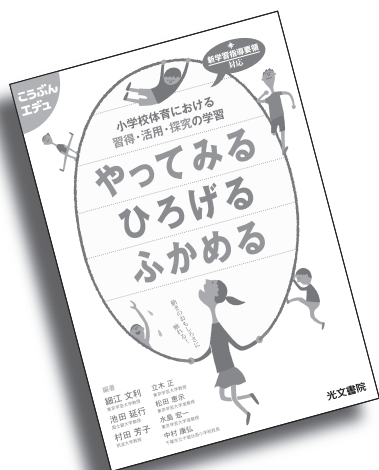
[ブランロッシュ株式会社](#)

〈大会協賛企業〉

[トップツアー株式会社](#)

本財団事業は

[「公益信託日本教育シューズ学校体育振興基金」](#) よりの助成を受けています。



新学習指導要領対応

小学校体育における習得・活用・探究の学習

好評発売中！

やってみる ひろげる ふかめる

新たな学習過程の構想

やってみる ひろげる ふかめる

の3つのフレームの考え方をもとに
11の理論編と27の展開編で構成！

定価 1,900円(税込)
B5判・144ページ

【編著者】

・前東京学芸大学教授 細江文利 ・東京学芸大学教授 立木 正
・国土館大学教授 池田延行 ・東京学芸大学教授 松田恵示
・筑波大学大学院教授 村田芳子 ・東京学芸大学准教授 水島宏一



学ぶことが好きになる。

光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町 14

TEL 03-3262-3271 / FAX 03-3230-4190

URL <http://www.kobun.co.jp/>

小学校体育実技DVD

⑦,⑬…教育映像祭
最優秀作品賞
文部科学大臣賞受賞

DVDの機能を生かしてきめこまかなステップの練習が繰り返し視聴でき、必要に応じて字幕を見ることもできます。

〈体づくり運動編〉

- ①低学年の体づくり運動
- ②中学年の体づくり運動
- ③高学年の体づくり運動

〈器械運動編〉

- ④器械・器具を使つての運動遊び
- ⑤マット運動
- ⑥鉄棒運動
- ⑦跳び箱運動

〈水泳編〉

- ⑧水遊び／浮く・泳ぐ運動
- ⑨クロール／平泳ぎ／背泳ぎ

〈ゲーム・ボール運動編〉

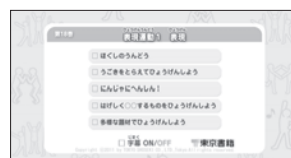
- ⑩ゲーム(ボールゲーム／鬼遊び)
- ⑪ゴール型I
- ⑫ゴール型II
- ⑬ネット型
- ⑭ベースボール型

〈陸上運動〉

- ⑮走・跳の運動遊び
- ⑯短距離走・リレー／ハードル走
- ⑰走り幅跳び／走り高跳び

〈表現運動〉

- ⑱表現
- ⑲リズムダンス



全19巻 DVD 各巻約60分
価格 各9,975円(税込)



〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1 Tel:03-5390-7481 Fax:03-5390-6012

ホームページ… <http://www.tokyo-shoseki.co.jp> 東書Eネット… <http://ten.tokyo-shoseki.co.jp>

新しい体育の授業づくりに取り組む先生、保健体育教師を目指す学生におすすめ！

新しい 体育 の授業づくり

編著者

勝亦紘一 (中京大学名誉教授)

家田重晴 (中京大学教授)

- 体育の授業や運動部の活動を通して、生徒たちが楽しく生涯にわたるスポーツライフの基礎を築くための、指導者の道標。
- 保健体育科教育を熟知している著者が、21世紀の新しい体育への授業づくりへの挑戦。

B5判 208頁 定価(本体2,000円+税)

大日本図書

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-11-6 ☎03-5940-8679 FAX.03-5940-8688

大日本図書ホームページ: <http://www.dainippon-tosho.co.jp>

【新体力テスト集計・分析システム】

(文科省発表新体力テスト準拠)

体力づくりをめざして

- 個人カードはカット済
- 部活顧問用資料を充実
- 測定実施の完全/バックアップ

集計・分析処理料金(1人分)

220円(税込)



第一学習社

TEL082-234-6800 FAX082-503-3084 〒733-8521 広島市西区横川新町7-14

- 大阪支社/☎06-6380-1391
- 新潟営業所/☎025-290-6077
- 横浜営業所/☎045-953-6191
- 福岡営業所/☎092-771-1651

- 札幌営業所/☎011-811-1848
- つくば営業所/☎029-853-1080
- 名古屋営業所/☎052-769-1339
- 金沢出張所/☎076-291-5775

- 仙台営業所/☎022-271-5313
- 東京営業所/☎03-5803-2131
- 神戸営業所/☎078-937-0255
- 沖縄出張所/☎098-896-0085

以下の資料をお届けします

- 学校総括表
- 順位一覧表・級門分布表
- 判定別一覧表
- 生徒指導カード(個人カード控)
- クラス台帳
- 生徒指導台帳
- 部活分析表
- 運動部活別比較表
- 部活台帳
- 学校集計資料・保健部資料
- ★教育委員会提出資料を完備

成長期の正しい足の発育促進に大きな効果を
発揮する画期的な21世紀のシューズ。

**教育シューズ
フレッシュ21**

教育バレー®DX

推薦

(財)日本学校体育研究連合会
全国小学校体育研究連盟



4つの優しさ

優しさ 1

つま先ゆったり!
外反母趾予防設計

優しさ 2

洗たくカンタン!
はすせる中敷

優しさ 3

着地らくらく!
衝撃吸収材

優しさ 4

足にピッタリ!
0.5cmきざみ

財団法人 日本学校体育研究連合会特別賛助会員

日進ゴム株式会社

〒700-0975 岡山市北区今8丁目16番17号

TEL (086)243-2456 FAX (086)242-0550

<http://www.nisshinrubber.com/>

教育シューズ **教育バレー** は、日進ゴム(株)の登録商標です。

Wacoal 下着指導でお困りではありませんか？

ツボミスクールの「出張教室」「読む下着教室」をお役立てください！



出張教室

開催エリア限定

出張型授業
ツボミスクールを
開催しませんか？



ワコールでは2001年から下着教室「ツボミスクール」を開催しています。スクールでは、女の子のからだの成長と下着の基礎知識を楽しく学ぶことができます。

体型変化や下着についてご指導される際に、ぜひご活用ください。(開催費用は無料)

<各コースのご案内>

●小/中学生コース

(所要時間約60分)

対象：小4～6、中1～2の女子

※授業時間内でも対応可能

●保護者/教諭向けコース

(所要時間約60・90分)

対象：小1～中2までの女の子の保護者、教諭(保健体育など)



**開催
エリア**

【関東】東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県
【関西】京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、滋賀県

読む 下着教室

対象：全国の希望校

**テキスト「わたしたちの
カラダと下着のはなし」
を希望校へお届けします。**

Dear Girls, わたしたちのカラダと下着のはなし

ツボミスクールで講師が話している内容をまとめたテキストです。成長期の体型変化や、下着の知識・情報をわかりやすく解説。初経指導や二次性徴などの指導にご利用ください。



下着サンプルセットのお貸し出し

テキストの補助教材として、教材用下着サンプルのお貸し出しも行っています。
(期間：3ヶ月)

※数に限りがございます。ご了承ください。



**Wacoal
Tsubomi
School.**

ホームページからお申し込みください。

<http://www.wacoal.jp/tsubomi/> ツボミスクール 検索

詳しい内容やお申し込みは、ホームページをご覧ください。Q&A もありますよ！

その他ご不明点は、下記までお問い合わせください。

mail tsubomi@wacoal.co.jp

TEL 0120-203-248 【受付時間】平日 9:30～17:30

株式会社ワコール

クロールで25m泳ぐ近道。

浮いて泳げる水着キット

クロールで25

クロールで泳げるようになりたい！
「クロールで25」はそんなお子様を
サポートする水泳キットです。

感動体験ムービー放映中！
詳しい情報はホームページへ。

<http://crawlde25.jp/>

検索



品名：クロールで25
品番：132129
サイズ：120～160cm
カラー：紺色のみ・男女兼用
仕様：オールインワン型水着
浮力シート 8枚セット
価格：4,725 円（税込み）



泳げる近道 1
着るだけで 体を4点の浮力で吊り上げ、水平姿勢（ストリームライン）をつくる水着です。
水平に浮く



呼吸するときも
上半身が沈まない
ようサポート

浮心
水平に浮く

沈みやすい下半身を
浮かせて泳ぎやすい
姿勢をつくります

泳げる近道 2
浮力が調節
できる
習得段階に合わせ浮力の調節ができます。
最後は浮力シートなしで泳げるよう補助。

前にフアスナーが
ついているので
着替えも簡単！



水着の内側にあるポケットへ浮力
シートを入れます。（左右に装着）



上達したら薄いシートへ交換

すまいるスイムシリーズ

【超はっ水で速乾・軽量】

速乾

軽量

超はっ水

超はっ水だからできる速乾・軽量！

着用者の90%以上が軽さを実感（当社比）。



水にぬれても、肌にはりつかずさらとした軽い着心地
超はっ水だから…「着替えがラクラク!!」

＊使用後の持ち運びもラクラク！ ＊通常の水着より速く乾きます！

安全・安心!!「赤外線盗撮」から子供達を守ります。

●水を弾き軽い! 体が浮く感じ!

●はっ水効果は3年以上持続!



赤外線盗撮防止素材を採用! 安心・安全な水泳授業を応援!
フットマークだけのオリジナル新素材!

技術企画・開発(協賛特許) 朝倉染布 株式会社 / 山田化学工業 株式会社
フットマークの新素材は、赤外線を吸収する染料加工を施すことで
悪質な赤外線盗撮を予防し、赤外線盗撮から子供達を守ります!



従来品

新商品

www.footmark.co.jp

※右記までご連絡下さい。資料等をお送り致します。

フットマーク株式会社 スクール開発販売部
東京都墨田区緑2-7-12 TEL:03-3634-0506

FOOTMARK®

大修館書店

ご注文は▶ ☎03-3868-2651 (販売部) <http://www.taishukan.co.jp>

*定価=本体+税5%

体育界の思潮をリードする

月刊

体育科教育

毎月14日発売

定価830円

■B5判

◎年間購読料
9,130円

小・中・高・大学の体育指導者や専攻学生を主対象に、体育・スポーツの諸問題を教育的視点から幅広く特集形式で編集。学校現場の課題解決に、情報入手に、理論武装に、よい授業実践に、教材開発や授業研究に、幅広く必要な情報を満載。新しい学習指導要領に対応した企画も豊富。

最近の特集

2012年10月号 体育の常識を問い直す／9月号 いまさら聞けない体育の常識Q&A Part3／8月号 ①いまこそ「遊び」の再生を ②保健の授業を創る／7月号 ロンドンオリンピックを体育授業に取り入れるために／6月号 わかる・できるを導く教具／5月号 ICT活用とこれからの体育授業／4月号 プロフェッショナル体育教師への成長プロセス／3月号 子どもの社会性と体育・スポーツ／2月号 いま、表現運動・ダンスの授業をどう創るか／1月号 みんなが楽しめる武道の授業を創ろう／2011年12月号 タグラグビーとフライングフットボールの学習指導／11月号 女性と体育・スポーツ—いま、何が、どう問題か



別冊

体育科教育

「具体的に授業に役立つ」ことを主眼において、体育授業に必要な技術指導や授業づくりのノウハウを斯界の研究実践家がわかりやすく解説します!! イラスト多数! すぐに使える学習カード付き!!

《新学習指導要領準拠》

新しいマット運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐、大貫耕一[編著] ●120頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

新しい跳び箱運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐[編著] ●104頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

新しい鉄棒運動の授業づくり

高橋健夫、藤井喜一、松本格之祐[編著] ●120頁 定価1,200円

《新学習指導要領準拠》

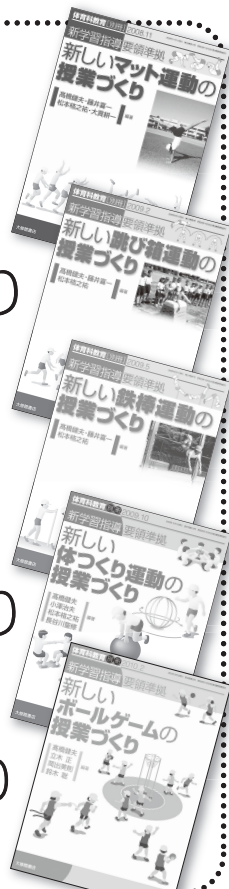
新しい体づくり運動の授業づくり

高橋健夫、小澤治夫、松本格之祐、長谷川聖修[編著] ●168頁 定価1,500円

《新学習指導要領準拠》

新しいボールゲームの授業づくり

高橋健夫、立木 正、岡出美則、鈴木 聡[編著] ●168頁 定価1,600円



Gakushin®

SCHOOL SHOES
S-2800



SPES
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

School Shoesとしての耐久性
ただ長持ちさせるのではなく、
運動性能と安全性能も大切です。

協和株式会社 神戸市長田区西尻池町1丁目3番8号
TEL : 078 - 611 - 4376 (代)

GOLDSTAR
SPORTS SCHOOL SHOES

GX

体育館
シューズ

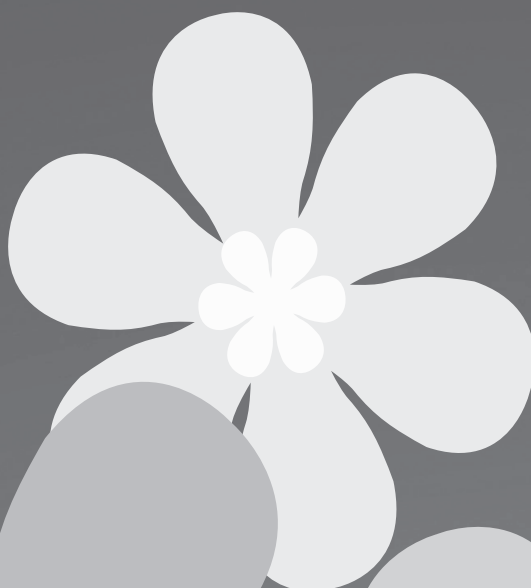
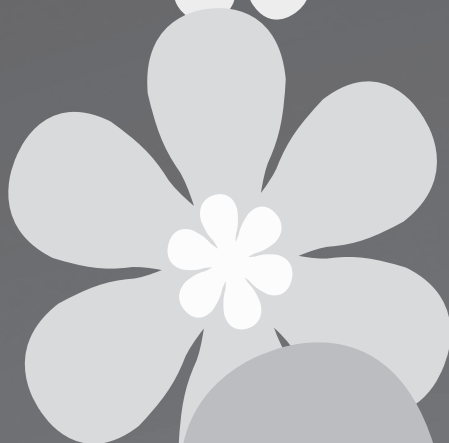
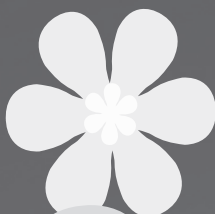


SPES
学校体育シューズ研究会
School Physical Education Shoes

高機能・ジャストフィットを実現
超軽量モデル 片足 (24.5cm) 290g

ASTICO
株式会社 アスティコ 岡山県岡山市中区江並417-1
TEL : 086 - 276 - 2010 (代)

ココロ花咲く、ステキな旅を。



お客様満足度100%+ α を追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。

55年の実績と豊富な情報力を駆使して

高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。

私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する

[旅行インテリジェンス企業]です。

出逢い、発見、そして感動。

トップツアー株式会社

観光庁長官登録旅行業第38号 © JATA正会員・ボンド保証会員

〒153-8550 目黒区東山3丁目8番1号

<http://www.toptour.co.jp>



TOPTOUR



Gakken
E-mirai Co.,Ltd.

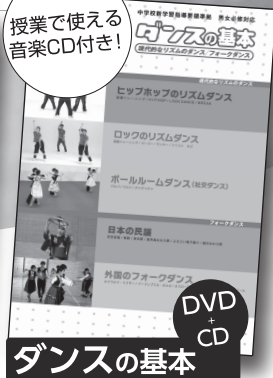
豊かな スポーツライフの ために

単元計画
授業モデル
技の指導
が充実！



男女必修
「武道」指導の手引き

授業で使える
音楽CD付き！



DVD+CD
ダンスの基本

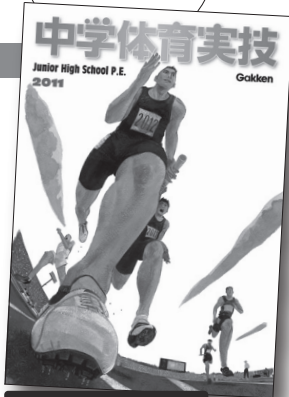
好評発売中！

(公財)日本中学校体育連盟 推薦



中学生の
スポーツ
メンタル
トレーニング
全9巻
スポーツ戦術
DVDシリーズ

平成23年度
全面改訂新版
★★★



中学体育実技

平成24年度
改訂新版！
学習指導要領
対応



中学保健体育の
学習 1～3年

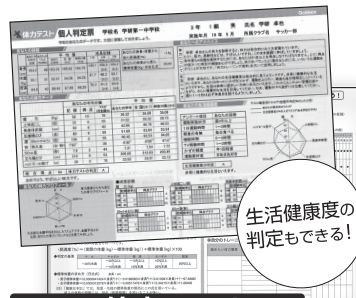


中学保健体育
ノート 1～3年

保健体育副読本



最新ルール
が1冊に！
図解
スポーツルール



学研式 体力テスト

生活健康度の
判定もできる！

(公財)日本中学校体育連盟 特別賛助会員

(株)学研教育みらい

学校教育事業部 TEL 03-6431-1151(代表)
〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

学研 学校教育ネット

検索

<http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>

スクールシューズのプレミアムスタンダード

教育シューズ® PK-X3



極める

グリップ性

耐久性

超軽量

サイズ…21.0cm～28.0cm 29.0cm 30.0cm 31.0cm アッパー…ポリエステル/人工合皮
ソール…合成ゴム/合成樹脂

(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

教育シューズ振興会

TEL(086)243-2218 FAX(086)243-2253

(製造部) 日進ゴム株式会社 TEL(086)243-2467

<http://www.nisshinrubber.co.jp>

e-mail:kyouiku-shoes@nisshinrubber.co.jp

その一着がスポーツ熱を刺激する。



(財)日本学校体育研究連合会特別賛助会員

(財)日本学校体育研究連合会推薦品

COLUMBINE
ACTIVE SPORTS WEAR

児島 株式会社

〒711-0911 岡山県倉敷市児島小川2-4-60
TEL 086-473-4634 FAX 086-472-0866

URL: <http://www.netlaputa.ne.jp/~kojima/>



JQA-EM 5215
ISO 14001 認証取得



JQA-QM7340
ISO 9001
JIS Q 9001